聖なるかな…終わりの剣

無理無理！？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖なるかな…終わりの剣

【Ｎコード】
Ｎ８６８２Ｑ

【作者名】
無理無理！？

【あらすじ】
自己満足作品なので期待しないでください。あといつ廃棄になっても不思議じゃありません。
神様？からテンプレ風にチートを得た少年は王道からかなり外れた世界に…少年の運命はどうなるのか！
まあ、チートだからそんなに危険じゃないんだけどな（笑）
てか強くないとこのシリーズでは瞬殺されておしまいなわけですけ

どねｗｗ

更新は作者の気まぐれです。でも週一で更新したいと思います

はじまりはテンプレ風に…（前書き）

初めてでよく分かりませんがよろしくお願いしま～す

少し修正あり

はじまりはテンプレ風に…

「っん……」

少年が目覚めるとソコは真っ白な世界だった。
何もなくドコまでも広がる真っ白い世界。
そんな奇妙な場所でも、少年は不思議と落ち着いていた。

「……ドコだ、……ここ？」

落ち着いた声で首を捻りながら、少年はゆっくりと呟く。

「おっ！　目が覚めたようだな」
「なっ！？」

少年が現状に対して疑問を持っていると、いつの間にか少年の前にその方は立っていた。
その方は男にも女にも見えて、大人にも子供にも見えて、とりあえず人というカテゴリーに全て当てはまるような容姿であった。
そのような方を見て、少年は思わず声が出た。

「なっ？　神様！　えっ！？　神様？」

口に出した瞬間、自分の発言に疑問を持つ少年。

あれ、なんで俺はあの人を神様だと？　でもあの人は神様だし。
いやだから、なんで神様って判るんだ俺？

少年は自分でもよくわからない自問自答をしていると、神様（多

分）が話しかけてきた。

「あー、とりあえず落ち着け」
「はい、神様」
「ＯＫー」

とりあえず少年は神様（多分）の言うこと聞いてみた。

「まず質問は後から受け付けるから、とりあえず俺の話しを聞け。分かってもらえたかな？」
「はい」
「よし、始めよう」

ＳＩＤＥ　？？？

神様（多分）の話しはこうだ　今目の前にいる、俺が多分神様だと思っている存在は神様で合ってた。
それで、何故俺が会って速攻で神様だ、と分かったのかというとそんなもんなんだそうだ。

はい、そこ文句言わない。

んで、なんと俺は死んでいたのでした。チャンチャン。

えっ軽いって？　気にするなよ。しかないだろ事故だったって言うし、諦めるしかないって神様に言われたんだから。

それで……

「転生ですか？」
「ああその通り、ちなみに拒否権は無いからな。神権限だ」
「……あのう一応聞きますけど。何でですか」
「ぶっちゃけヒマ」
「本当にぶっちゃけちゃったよこの人。あっ神様か」

まあ死んだはずの命を、転生させてくれるからありがたいけど。

「ちなみに行く世界は漫画の世界で、剣と魔法のファンタジーだぜ！」
「そうですか」
「うわー興味０、自分の事なのに」
「それで、そんな世界に行くからには、何かしらの力を与えて貰えるんですよね」
「あたぼうよ、神舐めんな。えーっと……なんかやるよ！なんか力やるから許せ！決してなんにも思いつかなかったわけじゃねえぞ！とりあえず世に言うチートだ！
じゃ早速行って来い少年！」

そして出てくるのは

魔法陣と言うのか？　よくわからないけど、この円のなかに立てばいいんだよな

そして立った時にふと

「そういえば、剣と魔法の世界って具体的にはどんな世界なんだ？神様」

「ん？え～と聖なるかなと言う世界じゃ…」

「・・・なぜにその世界！？もっと王道の世界があるだろ！ていうか俺プレイしたけどかなり前だから原作知識そんなに覚えてねえぞ！」

「別にいいんじゃね？行き当たりばったりで」

「投げやりだな…」

「神はそんなんだ。気にしたら負けだ」

「そういえばなんでその世界にしたんだ？」

「それはじゃな…最近やり始めてハマったから（笑）」

「あ～分かる気がする俺もハマった」

・・・・少し神様とお話し中・・・

「じゃ行って来い」

「へ～い。あ、神様」

「なんじゃ？」

「役に立つデバイスも欲しいな～在ると色々と役立つし」

「注文の多いやつじゃの～分かったから行って来い…もう眠いし…」

「じゃ行ってきま～す」

そうして俺は旅立った…

はじまりはテンプレ風に…（後書き）

そういえば始めたのはいいけど後のこと全く考えてなかったので早速アンケートします。主人公の神剣てどんなのがいいでしょうか…自分が考えた候補としては

永遠神剣　第０位　存存しない筈の永遠神剣

【終焉】形は日本刀

永遠神剣　第１位　【大罪】　モードは７つで

【強欲（グリード）】が弓

【色欲（ラスト）】がナイフ

【怠惰（スロウス）】が杖

【嫉妬（エンヴィー）】が槍

【傲慢（プライド）】が鎌

【暴食（グラトニー）】が剣

【憤怒（ラース）】が斧です

元ネタというかモデルはＦａｔｅの第５次聖杯戦争のサーヴァントです。
【色欲】の釘剣は使いにくいのでナイフに変更
それに【傲慢】の武器が乖離剣しか思い浮かばなかったので鎌剣のハルパーを使っていた事をおもいだし鎌にしました

永遠神剣　第４位

【断罪】　形は何にでも変化可能。元々は大罪を裁くためだけに神より創られた神剣で大罪と戦う際だけ大罪を超える力を発揮するがその他の戦いでは４位並の力となるイメージはジルオルＶＳファイムみたいな感じ

永遠神剣　第３位

【混沌】　形は剣と銃

永遠神剣　第２位

【憎悪】　持ち主がその場で最も必要な形になる。長く使い続けると剣に精神が呑みこまれ暴走する。

永遠神剣　第５位

【約束】　形は剣で見た目はまんま約束された勝利の剣(エクスカリバー)だが別に宝具では無いので真名解放は無いのであしからず…ただ単に見た目の問題。
だが神剣なので実際問題エクスカリバーより強力だと思う。これは【永遠】と同じで眠っている状態なので覚醒するやもしれない…

永遠神剣　第一位

【叢雲】　知っての通りナルカナ様。望にやるのはもったいないので横取りしちゃえ（笑）

別に望や時深の様に2本持っている人？もいるので2本でもかまいません

なおオリキャラやその他の神剣や入れてほしい主人公の能力などがありましたら受け付けますのでドシドシご感想ください。

一応書いておこう（前書き）

主人公設定

一応書いておこう

●主人公

雨宮（あまみや）　勇人（ゆうと）

容姿：腰まで届く銀髪でちょっと女顔（男の娘ではない）でよくいじられて遊ばれる。顔はちょっとしたイケメンフェイス。

性格：眠い～だるい～疲れた～がモットーの駄目人間。でも戦うとやたら強い。基本的にいつも眠たそう。戦うときはその場で思いついた技（笑）で戦う。だが、真面目になる所はちゃんとやる。

能力

『アカシックレコード』：うまく説明できないがこの世の全て森羅万象を見ることができる。

通常なら脳が焼けキレるが勇人の場合は気の狂いそうな激痛で済む。（これでもマシな方。通常は廃人になる）ので フィアによるバックアップが必要（補助ありの場合は多少痛みは和らぐ）なお、ここから能力をダウンロードしていく。パワフルプロ野球のサクセス時に使用するステータス確認で自分がほしい能力の取得ができるのと同じ。なお得る力が大きいほど痛みも大きい

『不老不死』：読んで字のごとく。だが死ぬときゃ死ぬ

保有アイテム

『魔導書』：ナコト写本とアル・アジフ。勇人が暇つぶしで描いたので生まれたての赤子同然

『別荘』：ネギまのアレ。２つ所有しておりリゾート用と修行用がある基本的にリゾート用は中１日に対して外１時間になっている（修行用は中１０年に対して外は１時間となっている）

『フィア』：神からもらったデバイス。基本的にあまり使われない（タイプはインテリジョン）

プロフィール

神の暇つぶしで転生した少年。だが転生した時間を間違えて、まだ世界が始まる前に来てしまい別荘に引きこもって（修行用）フィアにアドバイスをもらいながら修行していたらいつの間にか転生させた神よりも強くなっていた。だが野放しにもできないので人と神の中間である人神（じんしん）になった

一応書いておこう（後書き）

チート設定。要望があれば増やしていきます。

なお神剣は約束と叢雲に決まりました。

始まりは無（前書き）

本編です。つまらないと思いますが、勘弁してください

始まりは無

完全なる無限の無。

何も無い。なんにも無い。光が無ければ闇も無ければ影も形も無い。真っ暗な気がするから黒色だと思うと、確実に黒じゃない色にになる。色は無い。空気は無い。重力だって地面だって海だって空だって、

なんにも無い。

って、何でさ。転生したんじゃないの？

『ちょっと手違いでな……世界の宇宙そのものができる前に送ってしまったんだ……』

「……え？」

『そうだ原作以前にまだ生物すらいない・・・ごめんね（笑）』

「笑い事じゃねえよ！！？原作前に死ぬから！いくら頑張っても寿命で死ぬから！」

『大丈夫だ……不老不死にしといたから。まあ、不老不死とはいえ死ぬときゃ死ぬがな
不死殺しや細胞1つ残さず消えたらさすがに死ぬは・・・』

「下手したら原作前に死亡？」

『そうだな……頑張れよ能力の使い方は右ポケットに入れといたから。あと修行用にネギまの『別荘』も付けといたから頑張って……ククク！』ブツッ

・・・まあ、今更後悔しても仕方ないし修行するか・・・というか今更だが俺の能力ってなんだ・・・

「マスター」

「え？」

「だからマスター私は貴方が頼んで作られたデバイスだ。早速だが名前を決めてくれ」

「そうやいえばそんなこと言ったな。じゃあ名前は・・・フィアでどうだ」

「じゃあそれでいいや。そもそも名前なんてどうでもいいし。早速だが私は神よりマスターの修行のアドバイザーを頼まれているからしっかさぼらずに修行しよう。わたしは厳しいぞ（笑）」

悪魔だ・・・悪魔がいる・・・

「じゃあ早速俺の修行遍ｉｎ『別荘』だ。」

「はいはい」

そうして俺の修行が始まった。

・・・いやいやいやいやちょっと待て！

「俺の能力って何ぞな？」

「マスターの能力はアカシックレコードだ！」

「え？あのアカシックレコード？・・・死ぬは！！」

「そこから必要な能力（データ）をダウンロードする仕組みになっている。身体能力とかのデータも在るが自ら鍛えるに越したことはないな。あとアカシックレコードについては脳は焼けキレないがとてつもない痛みが走る。そこは私がサポートしてやるし我慢しろ」

「・・・わかったよ・・・で？能力てどうダウンロードするんだ？」

「まあ、パワフルプロ野球のサクセス時に使用するステータス確認で自分がほしい能力を選べる様な感じをイメージしてくれ。」

「わかった様な、わからない様な・・・」

「どうでもいいから始めるぞ。」

「Ｙｅｓ，　ｓｉｒ」

そうして本当に俺の修行は始まった。

そういえば別荘内の時間設定いくつなんだ？

始まりは無（後書き）

駄作ですいません。主人公は最初からチートではありません。

安全なチートへの道　その１（前書き）

久しぶりの更新・・・

安全なチートへの道　その１

【勇人ｓｉｄｅ】

既に１００年が過ぎた（別荘時間なので外では１０時間程度）。あの後色々と大変だった・・・思い出したくもない・・・

ちなみに俺がアカシックレコードで一番最初にダウンロードしたのが『精神持続』様は心が壊れない様にするためだ。アカシックレコードには現実で自称接続した人がいるがそれらの全ての人は廃人になったので事前に廃人にならない様にしておいた。あと『痛覚遮断（ペインキラー）』も入れたが結局感覚を戻した瞬間に痛みがフィードバックするので意味なかった

なお俺が他にもダウンロードしたのは

『ジャック・ラカンの身体能力』のみだ。へ？少なすぎ？うるせえ！お前知ってるか？アカシックレコードに接続した瞬間に来る痛みが！あれはもう言葉じゃ表現できないぐらい痛い。具体的に例を述べれば、麻酔なし＋意識を持ったまま全身を解剖される位の痛みだ。型月のカレー愛のシスターの苦労が身にしみてわかった。『精神持続』と『痛覚遮断』はそんなにすごい力ではないので、かなり重い頭痛程度ですんだが公式バグのジャック・ラカンの身体能力は痛いなんて騒ぎじゃなかった。『精神持続』を入れておいてよかったとしみじみ思った。なおジャックの身体能力でこれなのに身体能力＋気じゃあ１００％死ぬ。なので身体能力のみだ。

ちなみに１度フィアのサポートなしで勝手に接続したら１０年間ほど昏睡状態に陥った。フィアの大切さを再確認できた。フィアを神

様に付けてもらって正解だった。じゃなきゃ死んでる。

その後の修行でジャック・ラカンの能力をフルに使い身体戦闘のみを重視して修行した。独学では限度があったので、苦肉の策でＦａｔｅの英霊を召喚する『召喚（サモン・サーヴァント）』をダウンロードした。その結果

剣はアルトに槍は青い兄貴にと色々と修行した。途中キャスターに遊ばれた。どこに在ったかはしらないが女物の服を着せ替え人形の様に着せられた。別の意味でなにかを失った気がする・・・そういえば俺は魔力なんてダウンロードしてないけどその辺はどうなの？と聞いた所『別荘』の中が一種の魔力溜まりなので大丈夫らしい。あと黄金王は呼んでない。へ？理由？・・・察してくれ。おそらくその予想は当ってるから。

とか、まあ色々ありダウンロードしなくても『直感』『心眼（真）』『心眼（偽）』がＧｅｔ出来たのはおいしかった。

さてと次は魔法＋気方面の修行だな。ようやくキャスターの本領発揮か。

安全なチートへの道　その１（後書き）

修行遍その１です普通のｓｓは省くところですが一応書いておきます。

安全なチートへの道　その２（前書き）

修行遍その２

安全なチートへの道　その2

【勇人ｓｉｄｅ】

身体戦闘の修行が終わった後に新しく能力(データ)をダウンロードした。ちなみに入れた能力は『不劣化』分かりやすく言うと修行をサボっても力が落ちることが無い様にするための能力だ。新たな修行は魔力と気の修行だ。でも気も魔力も使えないので『上位魔法使い並の魔力』『多くも少なくもない程度の気』をダウンロードした。そしていつも通り頭痛に悩まされた。ちなみにランクで表すなら

魔力：Ｂ＋

気：Ｂ　　みたいな感じだ本当に多くも少なくもない。

これから後々ちゃんとしたものダウンロードするから待ってて。あと今回はちゃんと初めから師匠(キャスター)がいるので師匠の講座の元始めた。

マジパネェ・・・さすがは魔術師(キャスター)の英霊(サーヴァント)クソみたいな知識だった。そして晴れて免許皆伝？みたいな感じになった。とりあえずこれで魔術はだいぶマスターしたのでいったんストップして気の修行に励みますか……というか気ってどうやって使うんだ？…ｏｒｚそもそも其処から始める事に……

とりあえず2次元のキャラはひたすら瞑想をして身に着けていたは

ず！なわけで瞑想しよう。

〜〜1週間後〜〜〜

うん。無理！さっぱりわからん。てな訳で、知ってる人に教えを乞おう。・・・そしてダウンロードしたのは『教えの悟り』効果としては、俺が今までダウンロードした元々の能力の所有者に夢の世界で会えるという能力。そして俺には『ジャック・ラカンの身体能力』があるのでラカンに会える。てなわけで会いに行こう

〜〜〜作者都合で省略〜〜〜

とりあえずは理解できた。だが改めて思うとよく意味がわからん。気の使い方を聞いた時の第一声は「ん？そんなものは気合いでなんとかなる！！」だそうだ・・・全く参考にならなかったｏｒｚでもとりあえず気合い（やる気）を出したらなんかそれっぽいものが出たのでひたすらやったらようやく理解できた。その後何年間だったかは覚えていないがとりあえず独学で修業した。その結果画期的なものを編みだした。名前は『錬環氣功』その効果はというと自らの体内で気を生み出すことだ。これだけならよくわからないだろうがよくよく考えてくれ。魔力に限界があるように気にも限界がある。だが、体内で気を生み出せるのなら話は別だ。つまりこの『錬環氣功』がある限り俺は気には困らないのだ。さらにこの力のメリットは他にもある。俺は修行のうちに気を感じられるようになった。そ

こで判明したのは大気中にも気は存在するということだ。当たり前といえば当たり前か・・・大気中に魔力(マナ)がある様に気も存在する。その話は置いておいてこの錬環氣功を強化すればその大気中に存在する気も使うことができるのだ！。これで気には困らない。魔力もこれで代用しようと思ったがよくよく考えてみればコレむやみやたらに使うと魔力が枯渇して絶の枯れた世界みたいになってしまうので却下した。

～～１００年後～～

おひさ～魔力＋気の修行からもう１００年たった。その後気はもう充分なので魔力の修行を開始した。憧れのＦＦやＤＱの魔法も色々試した。（これは呪文の詠唱だけだからダウンロードの必要はなし）だが、問題が発生したそう魔力不足だ。Ｂ＋の魔力ではＤＱのメラゾーマやＦＦのファイガが２～３発が限界だった。魔力が欲しいメッチャ欲しい。だが痛いのはヤダという駄目人間思考・・・さてどうするものか…

結果…サーヴァント＆Ｍｙデバイスに脅されてダウンロードしました。その結果１年間ほど寝込みました。ダウンロードしたのは『１２７万程度の魔力』無印の頃のなのはの魔力ぐらいだ。いや～すごいですね。まさに才能を感じます。これでメラゾーマが４０発撃てるよ。笑いが止まりませんＨＡＨＡＨＡさらにゼロ魔の知識で空になるまで魔力を使えば魔力が伸びるらしいので試してみたら微妙に上がったので毎日やった。まあ・・・このような感じで色々と修行した結果こうなりました。

修業後のダウンロードスキル（魔法&気）の変化

『１２７万程度の魔力』⇒『３００万程度の魔力』

『錬環氣功』⇒『錬環超氣功波（大気中の気が使用可能）』

新ダウンロードスキル&Ｇｅｔスキル？（というか特技？）
（本編では略称）

『無音詠唱』　声に出さず詠唱可能。まあ、腹話術みたいな感じ

『道具作製（プランナー）』　ちょっとした魔法具が作れる。宝具でいうならＦ～Ｅ＋ランクぐらいの…

『百式観音』　有名なアレ。身体戦闘の時から毎日１万回じゃなくて１０万回やって覚えた。魔法遍の修行に入る前に覚えていたが作者が描くのを忘れてた。

みたいな感じになった。ちょっと後付け設定みたいなのがあるが勘弁してくれ。

さてと一段落したし２００年ほど休むか・・・

みたいな感じになった。さてとひとまずここでいったん終了だな。

安全なチートへの道　その２（後書き）

修行遍その２でした。最後で主人公の駄目人間思考が・・・

それはさて置き、またアンケートをとりたいと思います。

議題は神剣の神獣はどうするか、あとついでに主人公の新技とかをどうするか・・・

【叢雲】の神獣はあの不死鳥（フェニックス）で決定なのですが・・・

【約束】の神獣はどうしよう。普通ならアルトリアがいいんでしょうが主人公がセイバーと知り合いなのでその辺を配慮して別のに変えちゃうか・・・と最近思ってきたわけです。

なので候補としてはこんなのがあります。主にｆｆの召喚獣をメインで（というか神獣でそれしか思い浮かばなかった）アンケートがない場合はこちらで決めさせていただきます。

候補１　やっぱりアルトでしょ

候補２　ｆｆ１２の聖天使アルテマ

候補３　これまたｆｆ１２のゾディアーク

候補４　やっぱり約束といったら騎士王＝王者なのでｆｆ召喚獣おなじみの竜王バハムート。見た目は応募で決めます。

他にもこんなのは？と言うのがあったらどうぞ遠慮せずにおっしゃ

ってください。
あと新技の名前や属性などに応募がありましたらおっしゃってください。

番外編その１　禁断症状が出たんだ…（前書き）

番外編１です

番外編その１　禁断症状が出たんだ…

これは修行して間もないころの話

【勇人Ｓｉｄｅ】

修行していたら突然手が震えだした。その瞬間に俺は理解した、ああ…これはいつもの症状だ…

そうこれは俺がそうだな…確か中２の頃に発病？した厨二病という名の病気が進行しいつしか俺はＰＣを長らく触っていないと突然手が震えだすという発作？に見舞われることになったんだ…

まだ転生前の俺はその場合は速攻で家に帰って触ったが、思い出してもらおう諸君おれは転生？したんだ…しかも宇宙すれ出来ていない時にその時間にＰＣは在るか・・・答えは絶対に否だ。

つまりこの症状を解決する手立てがない・・・ヤベー（＜＿＞）

まじでヤベー

おさまれ！俺のパトス～

～～～見苦しいのでカットします～～～

ハーハーハーようやく一時的におさまったＺＥ☆

さてどうしようかコレ・・・読者の皆様マジなんとかしてくれ～

番外編その１　禁断症状が出たんだ…（後書き）

見苦しい番外編でした

番外編その２　そうだ・・・本を書こう・・・

「そうだ・・・本を書こう・・・」

こう俺が言ったのが始まりだ。

「は？気でも狂いましたか我がボケマスター」

最近マスターに対する誠意が見当たらなくなってきたＭｙデバイスです

「え～ほら俺この前２００年くらいの暇ができたからさ（自分で作った）この暇な時間の暇つぶしどうしようかな～とか思ってたんだよ」

「・・・・・・普通に修行を再開しなさいこのアホ」

「え～俺ってさやらないと決めたらとことんやらない主義だから」

「はぁ～・・・もう好きにしてください」

「早速だけど書くのは魔導書。それもとびきり強力な・・・」

「なんですか？アル・アジフとかナコト写本でも書くつもりですかこの色ボケが・・・」

「まあ・・・ブッチャケそういうこと」

「いったい書きあがるのに何年かかると思ってんですか・・・」
「ん？１００年もあれば十分でしょ」
「そんな暇があるなら少しでも修行しろよ・・・はぁ～」

そんなわけで書き始めました・・・へ？内容？見てもつまんないと思うけど１００年後・・・とかいって俺の血と涙の結晶が省略されたくないから１日だけ見せよう・・・

開始１日目

「さてと見栄を張って言ったのはいいが・・・肝心の内容が全く分からん・・・」
そう俺は書こうと勢いで言ったのはいいが肝心のアル・アジフとかの内容が全くもって分かんないから早速困っている・・・
「アカシックで内容を・・・てそこまでご都合主義なわけないか・・・さてどうしようk！！
そうだよ！！あの手があるじゃん！こうしちゃいられね～早速ダウンロードするか・・・」
俺が閃いたのは確かにアル・アジフのデータはあるとは思うが想像したくない・・・そう内容が濃すぎるから。ならアル・アジフの作

者の記憶をダウンロードすればいいんだ。たしか名前は・・・なんたらアルハザードよく覚えとらん。

ダウンロードした結果たしかに出来たには出来たがいかせんメンドイ予想していたよりもはるかに内容が多い。これ書いてたら精神的に死ぬ。あとナコト写本はしかたないから内容を丸々インプットした。いや～ジャック身体能力並に痛かった最古の魔導書・・・並のレベルじゃねーな・・・まあ、耐えたけど・・・

とまあ、いろいとありちゃんと書いた。これからはた２０時間ほど延々と書くだけの日々だからカットします。

フハハハ・・・ついに・・・ついに出来たぞ～マジ死ぬ精神的に死ぬ。さて後はハズキだけど・・・別にいいよね？俺もう疲れたよ・・・・・アルとナコトだけで十分だよね

精霊が宿るまで放置でいいでしょ・・・・・・いやちゃんと倉庫に入れておくか・・・修行中に巻き添え食らってアボンじゃ俺が終わる・・・

番外編その２　そうだ・・・本を書こう・・・（後書き）

ハズキの出番ははたしてあるのか・・・

もしもの番外編（前書き）

だだ狂った俺の妄想が暴走した結果です。

もしもの番外編

「ローガスに会ってみたい」

この一言が始まり。

ぶっちゃけると俺はローガスの名前は知っているが本物が本編でも名前しか語られていないので会ってみたくなった。だが・・・まだ宇宙すら生まれていないこの時代？にいるのか？という常識的な思考もあるわけで・・・

「よし探しに行こう」

『ついにボケましたかＭｙバカマスター』

「いや～会ってみたいじゃんローガス」

『どうなっても知りませんよ・・・』

大丈夫、大丈夫。こんな時のために新データをダウンロードしておいた。ダウンロードしたのはコミュ力の力、つまりコミュニケーションを円滑に進めることができるスキルだ。交渉の場にはもってこいのスキル、これで安全は保障されたは・・・・・・はず・・・だよな～

ぶっちゃけメッサ不安です。まあ、ものは試しですね・・・

ローガスに会えました！！いや～ご都合主義は怖いですね。

「どうしたんですか～そんなに涙目で？」

ハッ！！しまったつい冒頭に至ってしまった。

「なー遊ぶか？」

「はい！」

というわけで、ローガスと遊ぶことになりました。もちろん別荘（リゾート用）です。メッサ純粋だ・・・

まず、最初の１日目

「そうだ・・・アニメを見よう・・・」

ＰＣ禁断症状が出てから俺は、痛さに耐えＰＣなどの電化製品を生み出す力をＧｅｔしました。

へ？そんなくだらないことに心血をそそぐな？ＨＡＨＡＨＡ気にしない、気にしない

「アニメ？なんですかそれは？」

「とっても面白いものだよ。」

「じゃあみましょう」

というわけでロ―ガスとアニメ観賞会が開かれました。

まず第1作目：機動戦士ガンダム

第2作目：魔法少女リリカルなのは

などまあ、いろいろなアニメを観賞しました。ロ―ガスの反応は

ガンダムの場合・・・「かっこいいです～」「燃えます！すごく燃えます！」など

なのはの場合・・・「うぅっグスッ」「ボクはフェイトを絶対に救ってみせます！」「はやてちゃんの力になって・・・」とかまあ、いろいろ

・・・・・・へ？なにしてんだ？知るか！こっちの方が聞きたいぐらいだ！おそらくだが娯楽が全くと言っていいほど無い世界でこんなに楽しいものがあるのでハマったんだと思います。

「勇人さん～次の作品は・・・」

「あ～はい、はい」

～～～とまあ、いろいろあり～～～

「新しい僕、デビュー！！フヒヒ……ヽ（ °∀°）ノウェ」

なんだこれ・・・・・・

もしもの番外編（後書き）

なんだこれ・・・

すいません俺が狂ってましたｗｗｗ

いい加減に飽きてきた

「暇だ～」

そう俺は今すごく暇なのである。なんたってあの修行から実に１０００年の時が過ぎている。あ、そうそう確か３００年位だったかな？にＮＡＲＵＴＯの影分身使って修行すれば早くね？
と思いナルトのチャクラをダウンロードした。そろそろ耐性がついてきた様で寝込みはしなくなった。
結果を言うと、え？なに俺の今までの努力はなんだったの？みたいな感じになった。常に１０００体を出し続けている。それと感情は持つと邪魔だからあらかじめ無しにした。自分と同じ奴が死んだ魚の様な目で延々と修行しているのを見たときは寒気がした。
あと実験で『別荘』の内部でさらに『別荘』を使えばどうなるんだ？と思い試しさらに修行の時間が延びた。あ～今現実ではどれくらい進んでるのかな～
あと、正規の大発見は影分身に能力ダウンロードすればメッチャ効率いいじゃん！て事で試した結果・・・・・成功したにはしたがちゃ～んとご丁寧に痛みも返ってきた。・・・ちくそう・・・あ、そうそうオリ宝具やオリ技なども作った。それは後々見せるとしよう。

そんな事を毎日繰り返してたらいつの間にかチートになってた。具体的に言うと叢雲のノゾムを約５０％の力で圧倒できた。ちなみにそれはフィアの指令？＆暇つぶしで作った仮装シュミレーターで本物の８０％の力が出せるシステムで試した。そのまま調子に乗ってやってたら
……なにこの反則・・・みたいな感じになった。

それでどの道俺には不劣化があるしもう修行しなくてよくね？俺頑張ったよね？みたいな感じで大体３０００年ほどリゾートした。でも飽きたのでまた再開した。そして再度バトルしたところ、叢雲のノゾム＋ナルカナ＋ユフォーリアと戦い・・・・・・敗北した。へ？勝たんじゃないのか？ありえないだろ普通に考えて叢雲のノゾムで５０％なんだからそれ＋ナルカナ達じゃあ敗北するよ・・・まあ、その結果ムキになって影分身を１０００体から１００００００に増殖して修行しまくった。いや～俺もやりすぎたと思う。でもチャクラが足りなかったので尾獣のチャクラを入れた。なんか痛みは感じなかった・・・不思議だ・・・

まあ、その結果リベンジを挑んだ結果・・・超楽勝だった。本物の８０％だといってもまさか、１０％以下で楽勝だとは思わなかった。試しに５０％位で挑んでみたら・・・シュミレターが大破した。理由は俺の記憶にはございません。その後フィアにしこたま説教された。

多分あともうちょっとで神々の戦争が始まるのか？別荘×２で修業したので時間の感覚がおかしくなった。まあ、今の俺ならどんな敵が来ても楽勝だろ。

神Ｓｉｄｅ

「うん、まさかあ奴がここまでの才とは・・・もう力が遥かに俺を超えてるしな・・・どうしよう。挙句の果てには神もしくは大天使ミカエル、そして遥かなる悠久に封じられしルシフェルしか使えぬ神気も段々と覚醒しかけているし。マジ勘弁してくれよ・・・う～んこうなったら人神に推薦するか・・・でもな～俺より上はいないからいいけど下の奴らからの愚痴がうるさいしな～それともしも暴走してあいつに突っかかりなんてしたら・・・・・ハ～～しゃあ無い愚痴は我慢するか・・・本当に面白いんだが問題ごとも多いよなお前…ハ～～」

いい加減に飽きてきた（後書き）

次話でついに人神に・・・

人と神の世界

神Ｓｉｄｅ

「さてと、あいつを迎えに行きますかね」

勇人Ｓｉｄｅ

「う～んどうなったんだ一体？」

ありのまま今起こったことを話すぜ。俺は日課？の修行を終えて寝ていた。ああ、あと防御チートＧｅｔしました。その名も絶対領域、効果は火、水、風、土、の四大元素魔法を完全に無効化。その他の奴は効く。だが氷は水に雷は風に属するので無効、つまり効くのは光と闇ぐらいという魔法防御チート。だがそんな話はどうでもいい。
催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ　もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…位に混乱している。

「というかここな～んかどっかで見たような？どこだっけ？」

「お～い、そこの少年～」

少年って俺精神年齢は軽く１０００才越えてるぞ・・・というかあの人？は俺を送った神様じゃん。こんなとこで何やってんだ？」

「ひさし～な少年。早速だがお前には問答無用で神（仮）になってもらう。」

「へ？」

「だから神（仮）になれって言ってんだよ。ちなみに拒否権は無い」

「なんでだ？」

「お前気づいてないのか？お前に段々と神気まあ、つまり神の力が目覚めてきてるからだ
このまま放置しとくわけにもいかないし、だがイキナリ「今日から神ね」とか言っても納得できね～だろ？だから神（仮）だ」

「まあ、大体分かったけど神（仮）てなんぞな？というか神気てなに？」

「神気は神の力・・・効果は？ブッチャケ分からん。数多の神々も使えるが自分で何なのか理解できていない。でも「使えるならよくね～？害も無いし（笑）」で終わっている。だがお前らで言うところのマッドサイエンティスト？の神とか天使版が日々究明に向けて頑張っている」

おい神と天使一同！それでいいのかそれで！！

「へ～まあつまり俺をこれ以上放置できなくなったから神じゃないけどそれに近い存在にするってことだな？」

「つまりそう言うこと。じゃあ早速・・・・・・終ったよ」

早え～なオイ！！なにそんな簡単にできるのかよ・・・

「ちなみにグダグダと言わなくても俺は認めれば万事ＯＫだから」

「なら廻りくどいことしなくても会ったときにはもう終わってたじゃねえか！！」

「気にすんな、気にしたら負けだ。あと神気は俺が強制的に引き出しておいた。どれどれ量は・・・」

神Ｓｉｄｅ

さてさてこいつの神気はどんなもんかな～！！！！！！！！なっ何だこの途方もない力は！！ヤバイ！ヤバスギル！こいつが暴走なんてしたら俺達神々と天使たちが全員相討ち覚悟で勝てるかどうか・・・こいつの自覚が無い内に大半を封印じゃなくてもせめて抑えなければ！

「すげ～量だな。」

「へ～凄いんだ。でも使い方分かんなきゃ意味ないけどな・・・」

「使う方法と効果等はお前のデバイスに入れておいたから大丈夫だ」

こいつのデバイスに手を向けて知識を与えると同時にこいつにも手を掲げ力を封印する・・・・・ふ～なんとかなった。だがこの俺が全力で封印しても６割しかもそれでも俺より一つ下とは・・・

「とりあえず、用はこれだけだ。お前は今から人と神の間である人神になった、頑張れよ少年」

「うぃ～す」

そしてあいつを送り返してようやくホッとできた

人と神の世界（後書き）

ようやく人神に・・・次は人神化後のステータスです

ステータス（前書き）

人神前と人神後の細かいステータス

ステータス

〜〜人神前〜〜

【ステータス】

筋力　ＳＳ＋　　魔力　ＥＸ＋
耐久　ＥＸ＋＋　　幸運　Ｃ＋＋
敏捷　ＥＸ＋＋　　宝具　―

【保有スキル】

『精神持続』：アカシックレコード対策のために入れたスキル。なんやかんや言ってこれが一番役立っている。

『痛覚遮断（ペインキラー）』：痛覚を遮断する能力。能力のダウンロードの時の痛みがなくなれば・・・という淡い期待のためにダウンロードされたスキル

『不劣化』：いくらサボっても能力が落ちることがなくなるスキル。だらけるために入れた。

『錬環超氣功波』：大気中の気が使用可能。うまく使いこなせば攻撃するたびに相手の気（体力など）を吸収することも可能

『魔具作製（プランク）』：道具作製（プランナー）から進化して強力な魔具が作れるようになった。多大な代償を払えばＥＸランクの宝具も作れる。

『百式観音』：有名なアレ

『尾獣のチャクラ』ＮＡＲＵＴＯの尾獣のチャクラ。量は三～五尾ぐらい

『無音詠唱』：腹話術みたいなもの

『反逆者の宝物（ゲート・オブ・トリズナーゲート・オブ・バビロン）』：王の財宝の亜種でこの中に入れたものすべてに【対全】の効果を付属する

『絶対領域』：闇と光以外の魔法に対する絶対防御

『限界突破（オーバードライブ）』：成長の限界突破つまり全ステータスＥＸが可能

『対魔力』：魔法に対する防御能力、まだ絶対領域をダウンロード

する前のＶＳ英霊でキャスター対策のためにダウンロードした。本当はただキャスターにビビったから。ランクとしてはＡクラスでＦａｔｅのセイバークラス

『直感』：つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。研ぎ澄まされた第六感ランクはＢクラスで未来予知すら可能にする。英霊の修行という名の虐めで生き残るために知ら無い内に身に着けていた。

『カリスマ』：軍団を指揮する天性の才能。一国の主にはＢクラスあれば十分。主人公もＢランク、これは魅力にも影響しており、フィアの誠意もこれで回復されるはず！という期待を込めて入れられたスキル。

『言語支配者（スペルマスター）』：全ての言語を話せたり聞いたりできる。よくよく考えてみれば神たちの神剣言語って俺分かんなくね？と思い入れた。会話は一番最初のコミュニケーション！！

『矢よけの加護』：飛び道具に対する防御。ＶＳ英霊で赤い弓兵やハサン達が怖くてダウンロードした。ランクはＳ＋でアーチャーの偽・螺旋剣（カラドボルグ？）すらも回避する。

『心眼（真）＋（偽）』：修行、鍛錬によって培った洞察力。窮地において、その場で残された活路を導き出す戦闘倫理。真と偽を併用しているのでランクはそれなりに高い。むろんこれは英霊の虐め

でＧｅｔした。

『宗和の心得』：同じ相手に同じ技を何度使用しても命中精度が下がらない特殊な技能。攻撃が見切られなくなる。

『精神障壁』：精神面への干渉を無効化する精神防御。キャスターの女装に対する耐性で授かった、なんとも言えない能力。

『投擲』：ナイフなどを投擲する技能。これは狙い撃つぜ！がやりたくて身に付けた。大体１００ｍ先の物なら百発百中

『千里眼』：目のよさ。ランクが高ければ未来視も可能とする。主人公はＣランクなので赤い弓兵さん並

『無窮の武練』：いかなる精神的制約の影響下にあっても十全の戦闘能力を発揮できる。

『世界の真実』：“目”に関する全ての技能が使用可能

『幻想混合』：宝具を合成して新たな宝具を創ったり、力を底上げしたりできる。

『黄金律』：人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。主人公は黄金王クラス。楽して暮らすためのスキル（原作開始頃）現代人なら喉から手が出るぐらい欲しいスキル。

『陣営』：相手の幸運に比例して自らに有利な状況を作り上げる。相手の幸運がC＋＋以上であれば意味をなさない

〜〜人神後〜〜

【ステータス】

筋力　－－　魔力　∞
耐久　－－　幸運　B＋
敏捷　－－　宝具　－

能力は人神前に←が加わった。あとステータスが大幅にUPした。ステータスの【－－】はEXすら超越したので『表せない』

『神気』：神の力。どんなことができるのかはいまだに不明。おそらく、森羅万象を少なからず操作する能力だと思われる。

『神格』：神としての位、主人公は人神で純粋な神ではないので、あまり高くない
だが世界からの補正により若干の＋効果は得られる

『創造』：ナルカナやアセリアみたいに神剣を創造できる。だがその力はナルカナ達の比ではなく第１位神剣も作製可能。
だが代償として作成者の大量の命（寿命）＋莫大な神気そしてが必要。最悪の場合は死ぬ。勇人は死の淵を約１０００年ほど彷徨った。
勇人が作製したのは２本。だが何故か勇人本人が全く使えなかった。
ちなみに第１位を創造出来る神は、最高神～唯一神しかできない。
さらに最高神クラスでは、命の危険がある。勇人は神格は低いが神気の量が異常に多いので可能。

その他にも神になった後にＧｅｔした能力などもある。

ステータス（後書き）

修正の可能性アリ

人神前&後ステータス追加

神話は始まる（前書き）

リアルで忙しくて更新が遅れてしまいました。こんな駄作を楽しみにしている方に申し訳が立ちません。

神話は始まる

勇人Ｓｉｄｅ

報告・・・神剣を作製しました。名前は

永遠神剣　第１位　【魔王】

永遠神剣　第６位　【桜】神剣が作製可能なのを知って調子乗って作りました。初代作の【魔王】は滅茶苦労しまして創りました。名前は・・・ギャグです。それで１０００年ほど死の淵を彷徨いました。いや～第１位は伊達じゃないね・・・

６位の【桜】は６位ぐらいならどのくらいかな～と思い創ったところ、これはそんなに苦労しませんでした。

でも何故かこの２本共作成者の俺には全く使えなかったという不思議な出来になりました。それにやはり所有者じゃないからか神獣も現れませんでした。なんでだろ・・・それに俺の苦労はなんだったんだ・・・使えなきゃ意味ねえよ！

さて話は変わりますが

ついにこの日が来た。北天神と南天神との戦争。本来の主人公たちの前世。

そしてその戦争には、俺という名の介入者（イレギュラー）が加わる。さてまずは、破壊神（ジルオル）に会いに行きますか…

「お…ま……え…は…誰…だ……」

いや～木の根に力を吸い取られ続けるという地獄。想像したくないな。本来ならナルカナが助けるが…だがこれは原作とは違う。イレギュラーが存在する世界。

「なあ、助けてやろうか」

「無…理……に…決ま……ってい…る。俺は…助か…らない」

「ふ～ん。でもな、だが答えは聞いていない！俺が助けたいから助けるんだよ！」

「ふっ…勝手……な…やつ……だな…」

「お互い様だ」

そしてジルオルの周りの根を片っ端から破壊する。あと、マナを動けるぐらいに与えるさてこれからどうしようか…後のこと考えてなかったからな…

「さてジルオル君これからどうする？」

「・・・・・・」ありゃ寝てるし。ま、寝させておくか。ナルカナが来るまでここで待機しとくか…でも、保険として襲われないよう

に結界も作っておくか。

・・・・・よし、これで安全。さてと、俺も寝るか…

神話は始まる（後書き）

まさかのジルオル救出。あとナルカナとの接触フラグ

神剣は後々使用されます。神獣はコレがイイなどの感想がない場合こちらで決めます。

それと新たに出してほしい神剣などありましたら。ドシドシ感想にお書きください。全ては無理かもしれませんが殆ど出すつもりです。

君臨！最強（笑）の美少女（前書き）

ナルカナとの接触

君臨！最強（笑）の美少女

「あんた誰？」

結界ないで寝ていたらいつの間にやら例のあの人？に遭遇しました。そういえばいつの間にかジルオル君が消えていました。はて？ジルオル君はどこに行ったのでしょうか…ハッ！もしや危険を察知（ナルカナとの会話によりあるゲージが削られていく）して逃げやがったか！まあ、そんなことはどうでもいいとして、やっぱり人であるもの挨拶がコミュニケーションの基本でしょ。

「俺は雨宮勇人。言いにくいからユウトでいいよ」

「わかったわユウトちなみに私はナルカナよろしくね。」

「よろしくナルカナ。それで、ナルカナはどうしてここにいるんだ？」

「うん？私はジル…ジル…ジルなんたらとか言うのに会いに来たのよ」

？？アレ？？（「ー」？）・・・・・原作となんか違う気が…まあ、どうでもいいや。

「それで、肝心のジルオル君はいないみたいですけど。どうする？来るまで待つ？」

「う～んもう少し待つわ」

「なんなら探してきましょうか？」

「そう？お願いね」

「じゃあ、探してきま～す」

～～ジルオルサイド～～

ＦＵ☆ＺＡ☆ＫＥ☆ＲＵ☆ＮＡ！なんだ。こっそりあいつ（勇人は名前を教えていないので知らない）と後から来た女の話を聞いていたが、厄介事に巻き込まれそうな匂いがここまで漂ってるぞ！もうそういったことは御免だ。そんなことはどうでもいい。さっさとここから撤退しなけれｂ

「ジルオル君見～つけた」

「ギャ～～」

なんだ！心臓に悪いわ

「さてあの人との会話さ～俺一人じゃ雰囲気が辛いから巻き添え（協力）になってよ（してよ）」

「本音と建前が逆だ！」

「まあまあ、さて一緒に逝こうか」

「字が違ってあ～～」

君臨！最強（笑）の美少女（後書き）

ナルカナの話し方や性格に問題がありましたらご指摘ください。
あとジルオルが少し暴走（作者の暴走）

あと、この作品のナルカナは作者の知識不足で性格が原作と違う点などが多々起こると思いますので、その時はご指摘すださい。

旅立ちを迎えよう（前書き）

約束の神獣候補ありがとうございました。（まだ、募集中）

旅立ちを迎えよう

【勇人Ｓｉｄｅ】

「さてコレがご指名のジルオル君で～す」

ジル「∞％＊→◎！＃‡ゞΨζ！！！」

「なに言ってんの？」

俺「φ＃‡※？」

「あんたまでマネしなくていいから！」

ナルカナ弄ると面白いな！（笑）

俺「Ψζφ→◎！＃‡∞，％＆ａｍｐ；」

「もういいから！普通に喋って！」

「ハイハイ」

「ハ～まあ、それはともかく・・・こいつがジルオル・・なんか・・・変わった奴ね・・」

ハイ！俺のせいですね分かります。ああ、ジルオル君の言語が変な風になっているのは俺が悪戯したからです。した悪戯はネギまの認識阻害（俺アレンジ）をかけてジルオルがしゃべった言葉だけが未知の言語に聞こえるようにしました。
だんだんとジルオルが落ちキャラ扱いに・・・俺のせいですね分かります

「いい加減にしろーそんなに俺を弄って楽しいか！」

「うん！」
俺は満面の笑みを浮かべサムズアップして返した。と、同時にジルオルが悶えた

「くすっ・・面白いわね貴方達。気に入ったわ！」

「ここは至極光栄と言えばいいのか？」

「いやそれを言うなら光栄の極みじゃないか？」

「どっちでもいいわよ。ねえ、貴方達私と旅をしない？」

「う～んイイよどうせやる事なくて暇だったし」

というか元々俺はお前とついでにジルオルに会いに来たんだけどな

「ジル君はどうするよ？」

「俺は外を見てみたい」

「じゃあ気まりね！もう一度言うけど私はナルカナよろしくねユウト、ジルオル！」

「じゃあ俺も言うわ。俺は勇人言いにくいからユウトでいいよ」

「俺はジルオルだ」

「「「よろしく」」」

ジル「そういえばここからどう抜け出すんだ？」

「それならこれw」

「これを使いたまえジルオル君」

そして俺は俺の初めて作成した神剣である【魔王】を渡す。へ？強すぎ？いやそもそも作成者の俺が使えなかったんだから、試しにいろんな奴で実験しないとな・・・でもこれでジルオルが使えたら一気にエターナル化しちゃうんだが・・・

「これは？」

「永遠神剣　第1位【魔王】さ」

なんか横で「第1位！！」とか叫んでいるけど無視だ無視

「で？どうよ感覚は？」

「ん？初めて握ったから分からんが意外にしっくりくるような感じがする」

（≧◇≦）エーーーまさかジルオルが仮とはいえ【魔王】の適合者？だったらイキナリ最強ルート確定じゃ・・・

「ちょっと待った！」

「「ん？どうしたナルカナ？」」

「なに私抜きで勝手に話進めてんのよ！ジルオルこれを使いなさい」

そう言ってナルカナは【黎明】を渡す

「へ？え～と」

「「で？どっちを使うんだ（の）？」」

そう言って俺とナルカナがジルオルに迫る。ちなみに俺は本当に微妙に殺気を出して脅す

「両方共は・・」

「「だめ」」

「じゃあ」

ここからジルオルサイドに移ります

「「で？どっちを使うんだ（の）？」」

そう言って二人とも神剣？と言う物を渡してくるが・・・どうするんだよ！ユウトなんて微妙に殺気が出てるし！なにか！自分の方を選ばなきゃ殺すっか！でもユウトの方を選んでもナルカナに半殺しにされそうだし・・・・あれ？積んでね？

「「さあどっち！」」

どうってんだ～～～

旅立ちを迎えよう（後書き）

言い忘れていましたが【魔王】の形状は双剣
【桜】は二振りの小太刀です

どうでもいい事をふと思ったんだがミニオン達はファイアボール～とかで死ぬのならミサイルとかでも死ぬのか？

ジルオルがなんか落ちキャラ扱いしやすくなってきた。破壊神としての威厳が・・・

ステータスＰａｒｔ２（前書き）

今回はナルカナとジルオルのステータス

ステータスPart2

【クラス】：破壊神
【真名】：ジルオル・セドカ
【性別】：男性
【属性】：中立・中庸

筋力　S＋　　魔力　S＋
敏捷　AA＋　　幸運　D
耐久　AAA＋　　宝具　A＋＋

【保有スキル】

【騎乗】：A＋　この世の騎乗物なら、どんなものでも騎乗可能。

【直感】：B　戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力

【心眼（偽）】：A　視覚妨害による補正への耐性。第六感、虫の

報せとも言われる。天性の才能による危険予知

【対魔力】：Ｄ　魔力避けけのアミュレット程度の対魔力

【カリスマ】：Ｅ　軍団を指揮する天性の才能。統率力こそ上がるものの、兵の士気は極度に減少する

【勇猛】：Ｂ　幻覚・混乱に対する抵抗力。わずかだが、格闘ダメージの増加する

【戦闘続行】：Ａ　往生際が悪い。瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる

【無窮の武練】：Ｄ＋＋　一定の精神的制約の影響下ならば十全の戦闘能力を発揮できる。

【神格】：Ｄ　一応紛いなりにも神なので神格はある。世界からのプラス方向への修正だが今は機能していない

【神性】：ＥＸ　神霊適性のレベル。ジルオル自身が神なので規格外クラスに高い

【宗和の心得】：Ｂ　同じ相手に同じ技を何度使用しても命中精度が下がらない特殊な技能。攻撃が見切られなくなる。

宝具？

永遠神剣　第５位　【黎明】

【クラス】：？
【真名】：ナルカナ
【性別】：女性
【属性】：秩序・善

筋力　Ｓ＋　　魔力　ＥＸ
敏捷　ＥＸ　　幸運　Ａ
耐久　ＥＸ＋　　宝具　？

【直感】：Ａ　戦闘時における場の状態を“感じ取る力”。研ぎ澄まされた第六感はもはや未来視のレベルに至っている

【カリスマ】：ＥＸ　ナルカナの言うことは何故か間違っていても正しく聞こえてしまうクラス

【勇猛】：ＳＳ　幻覚・混乱に対する抵抗力。わずかだが、格闘ダメージの増加する

【戦闘続行】：Ａ　往生際が悪い。瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延る

【無窮の武練】：Ａ＋　いかなる精神的制約の影響下にあっても十

全の戦闘能力を発揮できる。

【道具作成】：ＳＳＳ　永遠神剣を創れる

【神性】：ＥＸ　神霊適性のレベル。ナルカナ自身が神剣なので規格外クラスに高い

【対魔力】：Ｂ　通常の魔法では傷つけるのは難しい。

宝具？

永遠神剣　第１位【叢雲】（自分自身の力）

番外編　始まりは突然なのでございますよ（前書き）

約束の神獣はスターダストドラゴンに決まりました。ご応募ありがとうございます。
まだ技や魔王、桜などの新神剣の神獣は募集していますのでどしどしご応募ください

番外編　始まりは突然なのでございますよ

「暇だ～メッチャ暇だ～なんか面白いことない？」

「「それ言うの一体何回目だと思ってんだ（のよ）」」

やほ～主人公の雨宮勇人で～す。前回から旅をすることになったんだけど・・・

暇です。メッサ暇です。やることがありません。初めのころはジルオル弄ったり、ナルカナ弄ったり、ジルオル弄ったり、ジルオル弄ったり、ジルオル弄ったりしてたんですけど飽きました。へ？ジルオルを弄る回数が多い？

ん？なんか反応が面白いんですよね（笑）まあ、それはさておき、ジルオル君が外を見たいらしいのでそこらじゅうを旅しているんですが、娯楽がないのですごく暇です。

「んなこと言っても暇なものは暇なんですよお二人さん」

「ほら！もうすぐ目的地なんだからシャキッとしなさいシャキッと！」

「は～ユウトは相変わらずだな」

「ん？あ！そうだ！娯楽がないならある場所に行けばいいんだ！」

「「へ？」」

「ねえ？あなた何を言ってるの？頭でも打った？なにか拾い食いした？」

「ナルカナの言うとおりどこか悪いんじゃないかユウト」

「失敬な！そんな風に見えるか？」

「「おう（ええ）」」

ｏｒｚ地味にひどいぞこいつら

「じゃあ、俺一人で言ってくるよ、ちくそうが！」

そうして俺は新技の時空歪曲（デストリクション）で空間を捻じ曲げて平行世界にいこうとしｔ

「「ちょっとまて（まちなさい）」」

「なんだよ・・・」

「「俺達（私達）も連れて行け（きなさい）」

「え～やだよ～なんで連れてかなきゃならんのだメンドイなに？君たち
暇なのか？」

「「そうだよ（そうよ）！死にそうな位に暇なんだよ（なのよ）」」

「しゃ～ねえなじゃあ俺の手を握れ」

そうしてナルカナ達は俺の手を握り

「しっかりつかまってろよ」

この世界から消えた・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「「「いや～極楽極楽」」」

今俺たちはゆっくり温泉につかっています。いや～気持ちいいね～ちなみ場所はどこぞの秘境の源泉です温度が６０度越えてるのに普通に入れちゃいます・・・地味に人間離れしたところを改めて自覚できた。結界も張って誰も来ないしサイコ～ああ、ナルカナはちゃんと女湯の方（俺が作った）に入っています。さすがに混浴はアウトだろ。

というか今更だがなんであの２人がこの言葉知ってるんだよ！

それから俺たちはゲーセン行ったり漫画を大人買いしたりしました。途中でＰ○Ｐなどのゲーム機も買いました。これで旅中の暇つぶしもばっちりだね！金は俺がロトで当てました。ちなみに２等で一億です。遊ぶ分にはこれだけで十分ですしね。

「戻るか・・」

「「いやいやまだだ！まだ足りな～い」」

なにかこいつらが俗世に染まったと思うのは俺だけだろうか・・・

番外編　始まりは突然なのでございますよ（後書き）

染まってるのか？原作でもナルカナは漫画読んだりしてたのでＯＫだと個人的には思います

南の女神（前書き）

更新

南の女神

「前回までのあらすじ

ジルオルを助けた俺はジルオルに会いに来たナルカナと遭遇
そのまま旅をすることになった・・僕たちの行きつく先には一体何
が待ち受けているのだろうか」

「「なにしてんだ（の）？」」

「ん？いや、なにか受信してな」

「そう」（かなりヤバイはねユウト）

「ふん」（大丈夫か？いや、あいつに限ってそれはないな）

「そういえばお前ら神に知り合いっているのか」

「俺はずっとあそこにいたからな」

「私はいないはね」

と言うことは戦争は時を待つしかないって事か

～～～数年後～～～

「なあ？最近北と南に不穏な気配が漂っていないか？」

「ああ、俺も最近感じている近い内に争いが起きるやもしれん」

「まあ、私は私たちに害がない限り放置するけど・・貴方達はどうするの？」

「そうだな・・俺はとりあえず最初は傍観だな後は分からんが」

「そうね、それが一番無難よ」

「とりあえず南を視察しに行こうと思う情報は必要だからな・・お前たちはそれでいいか？」

「「そうだな（ね）」」

「汝らはいったい何者じゃ？」

まさか俺も視察でいきなりヒメオラ（ナーヤ）に会うとは予想してなかった

旅は道連れ世は情け（前書き）

本当に申し訳ございません更新がだいぶ遅れてしまいました

旅は道連れ世は情け

「再度問うぞ汝らはいったい何者じゃ北天神か？」

「いやちがうぞ俺たちは唯の（・・）旅のご一行で～す」

「嘘をつけなぜ唯の（・・）旅の一行がこんな場所におる
もうじき北と南で戦争が始まるだからこの一帯も危うい逃げるなら
今のうちだぞえ」

「大丈夫、大丈夫俺たちこう見えて強いから」

「そうか、自分の身は自分で守れよわらわにはあずかり知らぬところじゃ」

ふむふむ、なるほどつまりヒメオラ（これからはナーヤとして扱います）
は俺たちを自分たちの争いに巻き込みたくないと・・・いいやつだなやっぱり
あのじゃじゃ馬姫（ナルカナ）が気に入るわけだ・・・

「…それはいいがお前はどうする？」

「わらわか？大丈夫じゃ自分の身ぐらい守れるわ」

「…そうか無理はしないようにな」

「わかっておるわ！おぬしに心配されずともよい」／／／／

お、顔赤らめちゃって初心だね～若いっていいな～

「で？どうすんのよあんたら？こっちに来たのは情報確認でしょ？それで南のことはわかったし今度は北に行ってみない？」

「でもな～こいつ置いとくにもな～」

「だ～からわらわは大丈夫と言っておろうに。そもそもわらわは南天神じゃぞ北になどいけるわけがない」

そういやーそうだな

「大丈夫、大丈夫この私ナルカナ様にど～んと任せておきなさい」

「へ？ナルカナおまえがそんなツテ持ってるなんて聞いてないんだけど」

「は？そんなもん相手をボコッて言うこと効かせりゃいいじゃない」

やっぱりか～ええ、そうですよそうだと思ったけど現実から逃げたかったんだよ

「そんなことしたら俺たち南と北両方から狙われるようになって安全な旅ができなくなるぞ」

「そっちの方が刺激があって面白そうじゃない！」

「ククク…いいじゃないかユウトたまにはナルカナの
我侭を聞いてやるのも」

「たまにはというか毎度のように聞いてる気がするんだが」

「細かいことは気にするな」

「もう！それじゃあ私がいつも我侭言ってるみたいじゃない！」

「「へ？いつも言ってるだろ？」」

「あ～ん～た～ら～ね～」

「何なんじゃこやつらは…変な奴等だが
・・・とても暖かい・・・」

「うむ、決めたぞ！わらわは汝らについて行こう！」

「「「は？」」」

まあ、そんなこんなで旅のご一行があらたに一名増えた・・・

旅は道連れ世は情け（後書き）

ご都合主義ですが勘弁してください

大食い・・恐ろしきかな・・

「おかわりじゃ！」

は～いみなさん。いかがおすごしですか？このまえナーヤが加わったのはいいんだけど・・・食費がというより食料が不足しています。・・・理由は・・・おわかりいただけると思います。

「ちょっとまて！一体どんだけ食うんだよ！俺たちの一週間分の食料が2日で消えるとかありえねえだろ！」

「まあまあ、ユウトそのへんにしておけって彼女も悪気があったわけじゃないんだ・・」

「とか言う割にジルオル君？なに人の飯どさくさに紛れてくすねようとしてるんだ？（笑）」

「・・・記憶にないな」

「いやいや、現行犯だからな記憶関係なし」

「細かいことは気にしないものよユウト」

「とか言いながらな～に君も手を出してんのかな？」

「・・・記憶にないは」

「・・・ハ～おまえらな・・」

「わらわのはまだか？」

「というかナーヤお前の分はとうの昔にお前の腹の中に消えている」

「あれじゃ足りんわ」

おかしいだろ！お前の分俺たちの３倍は入れたんだけど・・・

「我慢しろ」

「う～」

さてと・・・どうしよ食料が圧倒的にない・・このままでは全てがナーヤの胃のなかに消えてしまう

～～テント内部～～

「は～いお集まりいただきありがとう」

「早速だが今日の議題は俺たちの食料はどうするかだ」

「どこぞで狩りでもするか？」

「いいえ、男性陣は1日一食でナーヤは・・・2食にすれば問題はないわ」

「「却下で」」

まともな意見をナルカナに期待したのが間違いだったか・・という
か最悪の場合は俺が新たに能力を入れるしかないな・・痛たいのは
勘弁だが・・背に腹は代えられまい

～次の日～

「は～いこれから狩猟大会を始めたいと思いま～す・・はい、拍手」

「「「・・・・」」」

「なにを呆けてるんだ？」

「ユウト・・あれ本気にしたのか・・」

「まあ、妥当っちゃ妥当ね」

「ふむ」

「ルールはいたって簡単これから各自森もしくは山などに進行し一番多く
獲物や木の実などを取った者の勝ち・・ちなみに1位だった人には
誰か1人にどんな言うことでも聞かせる権利を与えま～す」

「「「！！！」」」

「各自頑張ってね～」

「これがあれば・・フフフ」

「これさえあれば・・俺は何かから脱出できる」

「これがあれば・・いくらでも食べ放題」

なにかブツブツ言ってるがまあ、良しとしよう

「では、3分後に開始しますので各自持ち場に付け～」

「ではスタート！」

その瞬間ジルオルが神速の域の早さで森に突入ナルカナも突入した・

・ナーヤはあれ？どこ行ったんだ？
まあ、俺はここで能力使って大量生産するけどな・・・へ？狩り？
いやだよ効率悪いし
ちなみに俺が入れたのは『量産』と言う力でいままで俺が触れたことのあるものをいくらでも量産できる（生物はコピーは不可）という能力だが今回は食料のみ出来るようにセットしたので気絶するほどじゃなかった

〜〜終了〜〜

「順位発表〜

1位　俺

2位　ジルオル

3位　ナーヤ

ビリ　ナルカナに決まりました」

「なんで私がドベなのよ！」

「いや・・お前のはみんな原型とどめてないミンチだったからに決まっているだろ」

そうナルカナの力が強すぎてなぜかナルカナが入った近辺は森が更地に変わっていた・・

「さてと、それは置いといて、な～にお願いしよっかな～」

「「「！！！」」」

「じゃあ・・」

ゴクッ・・生唾を呑む音が

「そうだな、よしナルカナにしよう」

「え～」

「「ホッ」」

「じゃあ、ナルカナお願いと言うか命令ね♪」

「・・・なによ」

「俺をお前の主（マスター）にしろ」

「へ？」

大食い・・恐ろしきかな・・（後書き）

何のマスターかは・・お分かりですよね？

泣きたければ泣けばいい（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。まあ、基本気まぐれなんですけど

泣きたければ泣けばいい

「えっと・・ユウト私の耳がおかしくなければ俺をお前の主(マスター)にしって聞こえたんだけど？」

「ああ、間違ってないよ俺を主にしろって言ったけど」

「え～とつまり・・私を貴方の従者にしろってこと？」

「あ～すまん、言い方が悪かったな・・・正しく言うなら永遠神剣第1位【叢雲】の化身であるナルカナ、君の主つまりは君を握る者になりたいと言うことだ」

「！？！？私を握るそれがどお言うことか分かって言ってんでしょうね！」

「無論理解しているつもりだ」

「ふざけないで！そんな気軽な気持ちで私が握れると思わないで！あなたわかってるの？私のマスターになると言う事は……今の自分を全て捨て去ると言う事！私と同じ……ナル存在として、永遠を生きると言う事に他ならないのよ！」

「……」

「永遠を生きる存在なら、エターナルも同じだけど……エターナルはマナ存在。他にも仲間は多くいるから、一人ぼっちと言う事はないわ。でも―

――」

ナルカナは違う。

彼女はナル存在。マナを食い、ナルという別のエネルギーに変えて活動する、

たった一人のナル存在である。

そして、彼女のマスターになる事は、自分もナル存在になると言う事であった。

「ふ～んで、それがどおした（・・・・・・）」

「え？」

「高々■■■■■■■■■■年すら生きていない小娘が知って様な口を叩くな」

その瞬間に俺は自らの魔力や神気などを解放する。その瞬間周りに圧倒的な威圧感が解き放たれる

「「「「！？！？！？」」」」

「は？一人ぼっち？ふざけんなよ俺はそんなこと断じて認めない！！！！」

「これは、如何しようもならないことなのよ・・・」

「ならなんでお前は泣いているんだ」

雫が、ぽたり、ぽたりと落ちていた。
ナルカナは自分の頬に手を当てて不思議そうな顔する。

「……あれ？　私、何で……」

「悲しかったんじゃないか？苦しかったんじゃないのか？なら、これからは一人じゃない俺が傍いてやる。もう、なにもかも一人で抱えこまなくていい。苦痛も悲しみも後悔も、すべて二人で分かち合おう。たとえどれほどの時がたとうとも俺たちは戦友として、盟友として比翼の鳥として、共に同じ路（みち）をいこう。ナルカナ俺は君を敬愛し信仰しよう」

「泣きたい時は泣いてもいいんだそれを馬鹿にする奴なんて……ここにはいないんだから……」

それが引き金となったのか、ナルカナはぼろぼろと涙をこぼして嗚咽を漏らすのだった。

泣きたければ泣けばいい（後書き）

中途半端なとこで終わってごめんなさい

ちなみにあの長ったらしいセリフの元ネタはデモベです。若干修正したけど

ナルカナの担い手

「おちついたか？」

「ええ、ありがとう」

「それで？返答を聞こうか」

「えっと・・その・・ごめんなさい」

「理由を聞いてもいいか？」

「再度言うけど私のマスターとなり、ナル存在になるという道は、広い宇宙の中で私だけを友とし、私だけを相棒として、私と二人だけで歩む道なのよ
私はそんな孤独の中にユウトを引きずり込みたくはない・・本当は一緒に居たいでも・・
駄目なのよ」

「は～お前もしかして自分が、今までどうり一人でありさえすればいいとか思ってないか？」

「だってそうなんだもの仕方ないじゃない」

俺はナルカナをこずく

「イタッ！ちょっと、何すんのよ！」

「だ～から言っただろうが何でも一人で背負い込むなって・・・」

「だって、だって、だって、」

まるで子供の様に泣きじゃくるナルカナ

「頼むからさ認めてくんない？」

「いいわよ、そんなに言うんだから認めてやるわよ！でもね、私の担い手に本当になりたの？」

「無論だ」

「じゃあ、我、叢雲の名のもとにかの者を我が主として認めよう」

「これからもよろしくなナルカナ」

ふと、心からの笑みをこぼす。はて？なんで俺はナルカナに執着したんだろうか？まあ、今はどうでもいいや。例えこの感情が恋とか、愛なら俺はそれを受け入れようと思った

「こちらこそ・・その・・よろしくねユウト／／／／」

ナルカナは自分でも自覚するほど顔を赤くして自らの担い手の名を呼ぶのだった

ナルカナの担い手（後書き）

本当は私を認めてみなさい！とか言って戦闘に入っる予定でしたが。肝心の部分になって戦闘描写ってどうやって書くんだ？と思ってしまい

修正ホント、文才がほしい

デレか！デレなのか！（前書き）

キャラ崩壊します

デレか！デレなのか！

「ユウト♪えへへへ」

あ～皆様いかがお過ごしでしょうか・・俺はただ今絶賛ビビり中であります。

いや～だってね・・デレるんですよあのナルカナが・・まるでツンデレがデレ期に入ったかのごとく腕を絡ませてくるんですけどまあ、そうするとナルカナのアレ（・・）が当たるわけでして・・・いろいろとガリガリと削られていくんです

「あ～とナルカナすごく歩きにくいんだが」

「いいじゃない別にだって私たちはこれからは、一心同体なんだもの♪」

ほら見てみろよ最近空気だったけど二人が何かありえないものを見ているかの様に固まってるじゃないか

「「・・・・」」

そして、ただ今俺が絶賛ピンチで～す

「まあ、いいや・・どうせ言っても聞かないだろうし」

何故こんな目に・・いや、俺も男ですから・・嬉しいんですどね・・・いろいろ人生？いや俺死なないし一応神？まいっか・・とりあえ

ず色々とあるんです

～～～その夜～～～

ナルカナＳｉｄｅ

この星空を見ながら思いだす
ついに見つかった私の主、あの人？と会ったのはたまたま通りかかって、ついでにと言うことでジルオルに会いに行った時だったわね。驚いたわよまあ、色々とだって敵がわんさかいるど真ん中で悠長に昼寝してるんですものねあの二人（笑）それよりも驚いたのがあの結界とてつもない強度、例え私本来の本気の一撃でも傷は付けられても破壊は難しいかもしれない程強力なものだった。たぶんそこからね・・ユウトとの縁は、我ながら変なことになったわね。それから色々なところを旅して。ナーヤに会って、それから、私の心を満たすかの様な言葉に不覚にも泣いてしまった。多分あそこからよね、私がユウトへの感情に気がついたのは・・・

「だから、今私はとっても幸せよ」

あれ？おかしいなまた涙が・・・

「よ、ナルカナ」

え！ユウトあ～もう最悪さっさと止まってくれないと、ユウトにバレちゃうでしょうが

「・・・泣いてたのか？」

「な、泣いてないんていないわよ」

「そうか、ならいい」

勇人Ｓｉｄｅ

「そうか、ならいい」

うそこけ、泣いてただろうが、まあ、強がりたい気持ちも分からんでもないがな

「ねえ、ユウト？／／」

「どうした？」

「私と契らない？／／／」

その瞬間時が止まった・・

「・・・すまん、説明を願う」

「うん、やっぱりさ、こういう関係は必要だと思うのよ／／／」

「・・・・・」

「やっぱり駄目よね？ごめん、変なこと聞いて」

「やろう・・・」

「だから、しようって言ってんの／／／」

「うん・・・／／／」

「やっぱり、タンマ・・・」

「女に、恥をかかせるの？」

拗ねたように、それでいて可愛らしい顔で言われれば動じない男は居ないだろう。

「・・・得意じゃないぞ」

「だ・・大丈夫よ！」

長い夜が始まった・・・

デレか！デレなのか！（後書き）

グハッ（吐血）

介入（前書き）

更新が遅くなって本当に申し訳ありません

介入

Ｓｉｄｅ　ナルカナ

日がちょうど真上に差し掛かるころ、ようやく私は意識を覚醒させた。

「んぅ・・・・・・」

「やっと起きたか。　結構長いこと気絶してたな」

「それはユウトのせいでしょ！　あんなの初めてだったんだから・・・／／／」

ううっ・・・、まさか初めてであそこまでやられるとは思わなかったわ。

「で、どうだった？」

それを私の口から言わせるつもり・・・・・？

「その・・・・・、よかったわよ／／／」

だって、あんなに気持ちいいものだとは思わなかったもの。

「ところで、貴方は経験あるんでしょう？　昨日の様子はどう見ても初めてじゃないし」

「さ～てどうだろうな」

ナルカナＳｉｄｅ　ＥＮＤ

「さてと今度こそ出発するか」

「「「そうだな（ね）（じゃな）」」」

『何者だ！！』

「あ、そういやこれ不法侵入じゃね？」

『なにを訳のわからんことを！』

そう言い神剣と思わしき槍を突いてくるが

「う～ん３０点てところかな？」

「なっ！」

いとも簡単にいなされ逆に

「ほらもってけ、凄いパンチ～」

「グハっ」

「さ～てとみんなは・・・聞くまでもないか」

ナルカナ：凄いイイ笑顔で無双中

ジルオル：流石に殺すのは駄目だろということで柄で殴って気絶させていく

ナーヤ：モーニングスター？をふるまわして無双中・・・あっ、また一人餌食に

『『何事だ！』』

「え～私どもは決して、決して怪しいものではございませんよ」

『『『嘘だ！！』』』

なんでこいつらがひぐらしのネタ知ってんだよ

「まあ、それで、かくかくしかじかと言うわけ」

『『『分かるか！かくかくしかじかだけで、分かるわけないだろ（でしょ）』』』

「ハハハ、ワロスwww」

『『『駄目だこいつ、早くなんとかしないと』』』

今更思ったが滅茶苦茶生きぴったりだなこいつら

まあ、いろいろあって

「じゃあ、この件を見逃してくれたら北天神に多少は協力しよう」

「俺たちは古の神(いにしえ)だ腕は保障するが、そちらの命令は一切受けずこちらは独自で行動する」

『少し待ってください、命令を聞かないのではこちらの陣営に入ったことにはならないのではないですか？』

「確かにその通りだが、あくまで協力だ。お前たちに下ったわけじゃない」

「この条件が呑めないのなら少なくとも俺は南に向かう、どっちがいい？古き神を敵に回すのと、命令を聞かなくても敵対はしない方、ちなみにおすすめは前者だ」

『『『わかりました（た）』』』

そんなわけで北天神に参加することになった・・・
ナーヤはかなり複雑そうだ

そして俺たちが参加したころから争いは激化した、その頃俺達はと言うと

「「「「Ｚｚｚ」」」」

寝ていた・・へ？参加しないのか？いや、俺たちが戦線に加わったらバランスブレイカーもいいとこだろうが、なのでヤバくなるまでは、待機する
ナーヤもこれで多少は満足そうだった、決別しても過去の仲間だから抵抗があるのだろう

そうそう、最近いろんな奴と知りあいになった例をあげるなら

アルニーネ（カティマ）：鍛練中に出くわしたので剣の師事したり、休憩中に茶をしたりした

シェミン（タリア）：編み物をしていたので悪いところを指摘したり、部屋が散らかっていたので少しかかたずけを手伝った

ファイム（希美）：たまたま、お茶しているときに通りかかったので一緒にお茶

サジタール（ソル）：殴り合い

へ？最後のがおかしいだろ？いいんじゃね？ソルだし・・・
ちなみにジルオルはこんな感じ

レオーラ（スバル）：愚痴＆人生相談

サジタール：殴り合い

などなど、また殴り合いか・・・あいつらも好きだね、後人生相談って・・・頑張れジルオル・・・主に俺のせいだけど（笑）

そんなこんな、している内にそろそろ北天神の勢力がヤバくなってきた

介入（後書き）

そういえば思ったのですがナルカナはいいとしてルプトナはどうしよう？

元々ジルオルを探すため二すために創られたらしいですけど、このＳＳではナルカナと分かれる気が無いのでルプトナの存在意義が消滅されてしまうのでこのままだと原作キャラが１人消えてしまうんですよね・・・

そこでまたまた、アンケートを取りたいと思います

？無理やり理由をつけて登場させる・・・原作キャラだし

？無理して登場させなくてもよくね？原作キャラ１人消えちゃうけど

お知らせ

この頃更新が遅くなって申し訳ございません。
単刀直入に申しますと家のＰＣが現在故障してしまい筆記ができない状態です
一ヶ月中には治ると思いますのでなにとぞご容赦ください

以後字数稼ぎ

ｊｆｊンｇｊｋｆｈｇｋｐじゃｆんギエｒｇ非ｄｆｊｂ時ｂｆｈビｆ語彙ｖじゃフィｇｈｒｇｊ不ｖｈ知うｊヴィｈｊｆギｈｂｊｋｆｄンｇｈｊｋｊ苗ｒｈｊｇへｂネｊｈｇジェｊｋｇｆｄｊｖネｒｊｔｈｊｈｖはエｊｈｒｆｈｊｇへアｆｇはｋｊｖｆンｄｈｇな絵ｋｐンがｊんヴァｋｈｘｃｖｈにテュイｈｊｋｒ不ｖｈｊｊｈじゃｆｋｊンｇｈｊらｈｇｋｊ連ｇｈレｊｇｋｊｑへｒ儀ｑｊ火ｙ血ウｑｇｊｖｊへｒｖンフィｖンｆｄｊｖｂンｖｇネｈじうｇべふｇｂうぇｇｈｂｗゆいえぐじぇｒｈｇｊかｈｇヵんｇ，ｊｓｊｍ；ｌｊひあじょいｗ４う６いうｙ６おい２う０い８ゆいおｐうぇｒじょぷいｑ４ｗｙ９あえｒｊｈんｊくぇは０９えうｊごいあｒｊｄｇｋｊｒｈ

コレが僕達の戦争だ（一方的だけど）（前書き）

本当にすいません更新が停滞してしまいました

コレが僕達の戦争だ（一方的だけど）

「フハハ見ろ、敵がゴミのようだ！！」

「な～にトチ狂ったこと言ってんのよアンタ」

「・・・ユウトは頭のねじが数本抜けてるからな」

今スゲ～失礼なこと言われた気がするが・・ま、いっか

「古神さま準備完了しました」

「ん？そうか。お～いナルカナ、ジルオル一番槍は貰うぞ」

「「好きにしろ（したら）」」

「じゃあ遠慮なく・・・

古より伝わりし浄化の炎よ…落ちよ！！！【エンシェントノヴァ】！！！！」

詠唱を終えると敵の中心辺りにあり得ないほどの熱量を持った熱線が落ちた

それを喰らったものたちは皆体を焼かれ、死んでいった。その一撃により敵の約６割は消滅していた

「すごい・・・こんなにも敵が減るなんて・・・コレが古神の力・・

・」

名も知らぬ兵士が感嘆の声を上げていたがそれにかまっている暇はない

「…うわぁ…やり過ぎた」

おかしいな？出力調整間違えたかな？精々２割削るぐらいで打ったんだけど…

「「やりすぎだ（よ）！」

「ごめんごめんご」

「ハッ！全軍攻撃開始！」

呆然としていた上官が指令を下すが、そんなことせずとも敵はちりじりになって逃げていき俺たちの圧勝になった

北天神陣営Ｓｉｄｅ

「ありがとうございます古神様これで我が軍は南を退けることができました」

「気にするなこっちが勝手にやったことだ」

「古神様がいてくだされば我らに敗北の二文字は在りませんな」

「まあ、俺たちが出るのはこちらが危うくなったときだけだがな」

「そんなことは気にせず一献いかがです？」

「ああ、いただこう」

そしてこの戦いも終わりまた次から次に戦争戦争よく飽きないなあいつら

こちらが危うくなるたびに俺たちは戦場に赴き敵を殲滅した

その結果変な二つ名がつけられた

俺：【煉獄の魔術師】【暗黒の破壊神（バスタード）】【見敵必殺（サーチアンドデストロイ）】などなど

ジルオル：【一人軍隊（ワンマンアーミー）】【魔光剣神（アラオウ）】など

ナルカナ：【無双神姫】【荒神（アラガミ）】【破壊神の嫁】など・・・ん？なんか最後のほうに変な文字が入っていた様な

厨二病患者か俺たちは

そして運命は残酷にも設定されている道を選んだ

「は？すまんもう一度言ってくれ」

「・・・・・・ナ―ヤが死んだわ」

「冗談だよな？」

「・・・・・・本当だユウト南の神に殺された」

言っていることが理解できなかった・・・死んだ？ナ―ヤが？誰に？南天神に？

何故？俺たちといたから？　フザケルナそんなくだらない理由で

「みんなすぐ戻るここにいてくれ」

「ええ」

「ああ」

南天神陣営Ｓｉｄｅ

「いや～まさか裏切り者を始末できるとは思いませんでしたな」

「いやはや全く我らを裏切るなど恥知らずもいいところだ」

「・・・あの」

「ん？どうした」

「いや、まさかこれに怒ってバスタードやアラオウが攻めてきたりしたら・・・」

「心配せずともよいすでに対策は整えてあるモシ奴らが来ても袋のねずみじゃ」

「そうですか。だすが遠距離からの攻撃には」

「心配せんでもこちらにはあの“盾”がある大丈夫だ」

それが我らの最後の言葉になるとは考えてもおらなんだ。そして頼みの綱も奴らの前には紙屑にも等しいことを理解した

勇人Ｓｉｄｅ

「さて暴れるか」

今俺は丘の上から敵の陣営を見ている奴らは今もなお臨戦態勢でいる・・・つまり

「俺が来るのを予知している・・・つまりそれ相応の対策が整えてあるということか」

「だが、それでもこの怒りをぶつけなきゃ俺が俺でなくなってしまいそうだ」

「さあ行くぞ歌い踊れ南天神よ豚のような悲鳴をあげろ」

「暗黒よりもなお暗き存在（もの）、憎悪よりもなお憎き存在、神々により葬られし絶対たる悪の化身たる汝の名において、我今ここに闇を従えん、我等が前に立ち塞がりし全てに闇よりあふれ出たる汝の力もて、等しき死を与えよ　神憎破（ラグナ・ヘイトレド）！！」

この呪文は俺のオリジナル・・・ベースはパクリだが

竜破斬（ギガ・スレイブ）（ドラグ・スレイブ）は魔王ルシファーの力である『消滅』

重破斬はロード・オブ・ナイトメアの『混沌』を与える。つまり何

が言いたいのかと言うと力を借りる魔王によりその力は変わる。
そして俺が力を借りたのはアンラ・マンユ（アンリ・マユではない）というゾロアスター教において絶対悪として表される創造神より邪神に堕ちたもの。
ゆえにこの邪神より与えられる力は『殺神』例え神にあらずとも神性をほんの少しでも宿しているのならばこの一撃はそのすべてを殺す（・・）たとえそれがどれだけ上位の神剣であろうが、永遠存在（エターナル）だろうが問答無用で殺す。故にこの一撃はこの世界においてどれだけ危険なものか理解できただろう。
そして副産物の“呪い”も凶悪でこの攻撃の被害を浴びたもの全てを汚染する効果がある。大地が汚染されようものならば、その大地に近づくだけで人は死に絶え、神は発狂する。そしてもう誰も近付くことができなくなる。
だが近づく方法が2つある。それはアンラ・マンユ、もしくはその契約者である俺の許しを得ること、その許しを得たものはその汚染された地域にも多少気分が悪くなる程度で済む。
そして、浄化つまり汚染を浄化する。この方法は『殺神』の逆である『赦し』の効果を持つ浄化や癒しを司る最高位の神による浄化が必衰だがとてつもない時間が掛かるのであまり効率てきとは言えない

オット、俺としたことが無駄話が過ぎたな話を戻そう。そんな凶悪な攻撃だが手加減して打った。本来の力で打つと、悲鳴を上げる間もなく死んでしまうからな

放たれた一撃は南天神の陣営を蹂躙し周りの大地を汚染するドス黒い瘴気にさらされたものは有機物、無機物関係なく死に耐える南天神の悲鳴が聞こえるその悲鳴はより瘴気を強くする。その悲鳴は1日中続いた

コレが僕達の戦争だ（一方的だけど）（後書き）

中途半端なとこで終わってすいません

それとアンケートは1になりました。やっぱり原作キャラは必要ですよね。

それと自分でも忘れていたけど約束の神獣はスターダストに決定しました。報告遅くなってすいません

怒り狂う（前書き）

短いです。いつものことだけど

怒り狂う

「邪魔だ」

そう言って敵をまた潰す。一体これで何人目だろう喰らった“魂”は記憶があいまいだ・・・

「消えなさい」　「失せろ」

ナルカナもそしてジルオルも剣を振るうその度に幾つもの敵がなぎ倒される。そう俺たちは怒っていた。少しの間とはいえ共に旅をしたものを殺されてかつてない怒り。そして殺した者たちを皆殺しにするために。ああ、こんなに怒りを覚えたのはいつ以来だろうか・・・

総数では北天神よりも南天神の方が圧倒的に多かった比率にするなら7：3ぐらい

だが怒り狂った俺たちに敵う者などなく北天神の陣営は驚異的な早さで南天神の勢力を削り落して行った。

もっとも、南天神陣営も手をこまねいていたわけではない。彼らもまた団結して攻撃を開始したが俺たちの敵ではなかった。

だがこの戦争で俺たちは幾多の別れと経験した。落ち込んだのも事実だがその中でもジルオルの怒りは群を抜いて激しかった。多くの南天神を打ち取りはしたものの、次々と親しい者たちが死んでゆき、俺達は南天神に怒りの鉾を向けた。ナルカナもヒメオラを殺されたことには怒りを覚えたらしく、珍しくいさめなかった。

必然的に俺たちを止めるものはいなくなり暴れ続けた

そして物語は終末へと向かいだす

怒り狂う（後書き）

次回で神話編は終了にしようと思っています

終わりの始まり（前書き）

「神話編これにて完結」作

「はいはい」勇

「反応が薄い」

終わりの始まり

南北天戦争――――

その最後の場面は、かつてジルオルが封印されていたログ領域、すなわち、この世界を作った創造神の御膝元、世界の基底部とされる場所で展開された。なにしろ、そこ以外の場所はもうすでに存在していなかったのだ

「この世界に残った神は、もう俺とファイム・・・・そしておまえとナルカナだけだな」

「おい、俺を忘れてるぞ」

「いや・・・ユウトはそもそも神なのかどうか怪しいし・・・」

「一応神だぞ半分ほど」

「「微妙だな（ね）」」

「うっさい」

「もういいか？」

「「「へ？」」」

復讐神ルツルジ（絶）は静かに聞く

「ああ、すまん。では気を取り直して喋ってルツ君」

「・・・・アルニーネ（カティマ）も、ヤハラギ（ダラバ）も、サジタール（ソル）もシェミン（タリア）も死んだ。南天の神々も、北天の神々も全て死に絶えた」

「決着の時だ、ジルオル」

ルツルジは身構えた

「・・・ルツルジ」

ジルオルは眉間に皺を寄せながら、寂しげに彼を見つめた。戦うしかないことはわかっている。

だが、どことなくやり切れないのだ。まるで兄弟と殺し合わねばならなぬ不条理に苦しんでいるような感じと言うべきか・・・ジルオル自身にも、この気持ちの正体は今ひとつよくわからずにいた。

と、ルツルジが口元をほんの少しだけゆるめた。

「少し汝に同情する」

以外な言葉だ

「次に巡り合うことがあれば・・・友となるのも一興かもしれんな」

「ああ、俺もおまえと、もっと長く話したいと思ったところだ」

ジルオルは剣を抜いた。永遠神剣第五位【黎明】勇人からはより強力な第1位神剣を与えられたが、どうにも抜けないでいた。

ルツルジが鋭く告げた

「この勝負手出しは無用だ・・・・・・いくぞっ、ジルオルっ！」

「応ッ！」

激しい剣戟の応酬。手加減など一切存在しない、互いに全力を出し切り合ったうえでの壮絶な戦いが始まった。実力が互いに伯仲しているせいだろう、互いに決定的な技を繰り出すことができず、純粋な剣技と体術を駆使した戦いが続いていた。

ただ・・・・・・両者の顔は、自然とたるんでいた。

楽しいのだ

こうして全力で剣を交えている瞬間が。

しかし、楽しい時というのは、一瞬の刹那にて過ぎ去っていくものだ。

「・・・ふっ」

ザザザッ――――と大きく後ろに飛び退いたルツルジが寂しげに目を細めた。

「くっ！力に体が耐えきれぬか――」

祖の体から霊光の粒子放出され始める

これにはジルオルもギョッとし、追撃をかけようとした姿勢のままこ凍り付いた。

ルツルジは背筋を伸ばし、永遠神剣【暁天】をさやに収める。
「不本意だが勝者はおまえだ、ジルオル・・・」
彼の体がどんどん透けていった。
「斬られてやりたいが、今回はそういうわけにはゆかぬ・・・・・・すまんな」
最後にルツルジは申し訳なさそうに微笑んだ。
直後、パシュ、と霊光の粒子が広がり、ルツルジの姿は消えた。
死んだのだ。
死を迎えた神の末路――その証拠にカラン、と音をたてて、彼が腰に差していた【暁天】が床に転がった。
神が本当に死んだとき神剣も消えてしまう。それが残ったということは・・・。
（転生・・・・・・するのか）
その話は平穏を享受していた頃、ヒメオラとユウトから聞いたことがある。
神々はたとえ死んだとしても、永遠神剣を寄り代とすることで復活できるという話だ。
これを神々は転生と読んでいた。
もっとも、これまで転生を果たした神が一柱も存在しなかったため、ただの唯の眉唾だと切り捨てる神も少なくなかった。
（ルツルジ・・・）
ジルオルは床に転がる【暁天】をジッと見つめた。
――次に巡り合うことがあれば・・・・・・友となるのも一興かもしれんな

彼の言葉が脳裏によぎった。
（・・・おまえが口にしたこと、決して忘れるなよ？）

その後、【暁天】に溜め込まれたマナが暴走を始めた。

「ちょ！勘弁してよ」

「ユウトもぐちぐち言わない！」

「ナルカナ！剣（つるぎ）を！」

「ええ！」

そうして権限するのは神々しくそして少々無骨ながらも全く無駄のない剣そう
永遠神剣第1位【叢雲】ナルカナの本当の姿。

「消えろや！」

【叢雲】が司るのはマナではなくナル。マナを喰らう力その力を最大限に使い暴走したマナを消滅させる。だが、いまの【叢雲】は力を分断されており本来の力を使えない。故に俺自身の魔力（オド）と神気でそれを補う。本来なら不可能だが俺は人神。人と神その両方の力を行使する者。そして俺を転生させた神いわく俺の神気神気は類を見ないほど強大らしいので大丈夫だろう
そうして暴走したマナを神気で力ずくで押さえつ魔力でそれを補佐。仕上げにナルで消滅させる。

ナル化マナになってしまうが関係ない。そんなもの後でいくらでも処理できる。

そうして暴走したマナは消滅しナル化マナになってしまったマナは浄化の光で本来あるべき形に戻る

だがそれに力を使い切り俺もそしてナルカナも眠った。最後に聞こえたのが

『一時こちらに来てもらうぞい勇人』

というあの時の神の声だった

まだ続くよ？

危うく暴走したマナに巻き込まれそうになった。だが、ナルカナとユウトが身を挺してこれを封じたおかげで、ジルオルは九死に一生

を得ることになる。
もっとも、これにより生き延びた神はジルオルとファイムだけになった。
そのファイムも、使命を果たしたがゆえに消えた。
こうして誰もいなくなった

終わりの始まり（後書き）

これにて神話偏は終了です。これからはちょっとした外伝が2～3話ほど続きます

あのジルオルとファイムの会話は神剣言語で喋っていて何言ってるのか分からないので飛ばします。申し訳ございません

浄化の光：本来の形から外れてしまったものを元の形に戻す

外伝その１（前書き）

今回は外伝その１

外伝その1

その部屋には3人の人がいた。正確に言うならば二人の少女と一人の青年である。

ある少女の方は、目を閉じている・・・・・・どうやら寝ているようだ・・・口元に涎が付着しているのは仕様である

青年は、少女の方に近づくと突然目の前にいる少女の方から強大な力を感じた。

「近づくだけでそれは、過剰防衛すぎやしないかい？俺じゃなかったらヤバいよマジで」

「そんなこと言えている時点で大丈夫でしょ」

青年は面倒臭そうな顔しながら目の前の少女に向けて言った。

「ちょ酷くね？俺のガラスのハートは砕けてしまいそうだ」

「・・・・・・」

「ごめん。だんまりはやめて」

一体こいつらは何しに来たのだろう

「で、どうすんの？」

「ん？こうして」

「【宿命】よ返事をしてくれ」

『・・・・・』

「あ！そういやこいつも寝てるんだった」

「馬鹿なの？」

「まあ、いいや」

「ところで【宿命】俺は彼女に用があるんだけどいいよね？」

『・・・・・』

力が弱るのを確認した青年は、少女に近づき、彼女の体に触れた。

「この子の意識にダ～イブ」

なんとも気の抜ける言葉である

その言葉が発せられた瞬間、周りに光が満ちた。

光が消えると、其処はどこまでも真っ白で何も存在しない一つの空間だった・・・・・・

いや、訂正しよう、先ほど寝ていた少女が其処にいた。涎は・・・付着していない

「初めまして、君はミューギィ・・・でいいのかな？」

「・・・・あなたは・・・・・・・だれ？」

「まずは自己紹介だな、俺は雨宮　勇人。仲間からはユウトと呼ばれている。まぁ好きに呼んでくれ」

「そう・・・・それじゃ早く私の前から消えてください」

彼女にとって、彼はどうでもいいようだ。

「どうして？　俺の用はまだ済んでないのだけど・・・」

「あなたの用には興味ない・・・私はただ眠るだけ・・・・・・」

「冷たいな～・・・・・・怖いのかい？ああ、それと寝ている君だけど口元に涎を付けて凄～く気持ち良さそうに寝てたよ」

彼は、急に真面目な顔をしながら少女に言った。

「・・・・・・ッ／／／」

少女はその言葉を聞いて肩をびくつかせる。と同時に赤面する。なんとも器用なことである

「ねぇ・・・・・・何にそんなに恐れているの？　それは力？　または神剣？　それとも自分？」

「・・・・・・さぃ」

「ん？　できれば「うるさい！！」っおぉ」

「あなたに私の何がわかるのですか！！　あなたにはわからない！

ただ思うだけで実現してしまうほどの力が！　望んだ訳でもないのに、私は、人も、世界も、宇宙さえも消してしまった！何もすることができない自分が！」

「たとえそれが自らの意思でないとしても！！　あなたには、この苦しみが・・・・・恐ろしさがわからないよ・・・・・・」

彼女は、今までの思いを吐き出すように叫んだ。

たしかに、世界、宇宙、そして人やエターナルですら消去してしまうその力は凄まじいだろう。それによって彼女は苦しみ、恐怖し、今こうして深層心理まで来なければこうして話すこともできないし、彼女の本音も聞くことができなかっただろう。

「くくく、あはははははははははは」

「何が可笑しいのよ！」

「だって、たかが宇宙を消し去った程度事で（・・・・・・・・・・・・・・）そんなに狼狽するんだもん」

「・・・・たかが・・・宇宙？」

「そう俺にとっては宇宙とは狭い世界なんだ。消し去るなら最低でも次元レベルにしないと」

「・・・・・・・」

「まあ、そんなことはどうでもいいよ。それで？」

「・・・・・・え？」

「それで、君は、どうしたの？力に恐怖して逃げただけ？　その神剣の力を制御しようとか思わなかったわけ？」

彼は何故その力を制御しなのかと問いたのだ。彼女にとって、恐怖し、私を恐れるだろうと思っていたのに、予想を裏切るかのように彼は言ったのだ。たかが宇宙程度と

「何かしたの？」

「したよ・・・・制御しようと頑張ったよ・・・・・・でも無理だった・・・・・・」

催促するかのように聞いてきた彼に対し、彼女は悔しそうな顔をしながら言った。

「そう・・・その結果が努力することを諦め、自身の心を壊すことで力を使わなくて済むようにしたんだ・・・言っちゃなんだけどやっぱりただ逃げただけじゃん」

「・・・・・」

「だんまりか」

「なあ、ミューギィ、知っているか？　君が心を壊してしまったあと、君の神剣【宿命】は悲しみに暮れたそうだよ？　その結果、君を防衛する力を残し、【宿命】も眠りに着いたそうだ。　あの子は、君が目覚めるのを待っているようにも見えたね。」

「つまり、なに君は神剣は今も頑張ってるのに、君は今も逃げてるんだ」

「いい加減に現実から目をそむけるのはやめろ」

「・・・・・・・」

「・・・・そういえば俺がここに来た目的を話してなかったね、ミューギィ・・・僕と世界を旅しないかい？」

「え？」

話を聞いていて、そして行き成り話題を変えたかと思うと彼は、とんでもないことを言い出した。彼女の反応があったのに気がついたのか、彼は話すのを続けた。

「僕と世界を回らないか？　君はずっと寝ていたようだし、僕は君に世界が美しいことを、生きることが楽しいことをもっと知ってもらいたい。　かつてジル君に俺とナルカナがそうしたように。　その過程で君の力の制御する努力をする、もちろん俺も俺のパートナーも協力する。　本音を言わせてもらえば、俺は君に興味がある。　だから一緒にいたい。　でも此処では楽しみがない。　だから俺達と世界を回ろう？　安心しろナルカナもずっと苦しんで苦しんで、ようやく助かったんだ。　君が助からない道理なんて無い」

「ホント・・自分勝手・・・・でも、おもしろいことを言うのね。是非連れて行ってと言いたいところだけど、今も私は寝ているのよ？　此処は、あなたが何らかの方法で入ってきた恐らく私の深層心理だとは思うのだけど・・・・此処にいるからこそ私は、あなたと

話すことができて外の現状を知ることができた。　でも、外の私は先ほども言ったように心が壊れているためずっと寝ているわ。　これをどうかしないかぎり私は、動くことすらままならない。」

彼女にとって、今まで生きていた中で、こんなことを言ってくる人は初めてだったのだろう、先ほどの悲しい顔とは違い笑みも出ている、それに不思議と言葉が出たようだ。しかも、その言葉は彼がそれをどうにかしてくれるかのような言葉だった。

「え？　自分で起きないの？」

彼も彼女の言葉に疑問を持ったようだった。

「だって、私を連れて行ってくれるのでしょう？　私は別に此処で寝ていれば、誰にも迷惑かけずに済むのだけれど、あなたが私を連れて行ってくれるのなら、私自ら起きるのではなく、あなたが私を起こさなくちゃ。　それに力の制御の方も協力してくれるのでしょう？」

彼女は、まるでしてやったりと、いったような笑顔と共に彼に向けて言った。

「・・・これは一本取られた。　たしかに用があるのは、俺なんだから俺が動かさないとだめだよな・・・わかった。　俺の目的のためミューギィ・・君を攫わせてもらう。」

「ふふ・・・・・・目覚めるのが何時になるかはわからないけど、期待して待っているわ。」

「昔とは違うだろう？　だったら起きれるだろ？　切っ掛けは得たのだから・・・でも今回は此処。　そう、目が覚めたときには全て終わっている、そのときにまた話しましょう」

彼が言いたいこと終えると同時に周りに光が少しずつ溢れていき、最終的には視界をも光で奪われた。彼女は光に埋まり、途切れていく意識の中ただ思った。私は、変われるかもしれないと、また逃げるのではなく進めるかもしれないと、そう思ったら自然と口から言葉がこぼれた「ありがとう」と・・・・・・。

光が収まると、どうやら始めにいた部屋に戻ったようだ。

「どうだったユウト」

「ふっ・・ちょっと小生意気な可愛い子だったよ」

「むっ・・」

「そう怒るなってナルカナ」

「さてと」

目的のために彼女を部屋から連れ出すのはいいのだが、彼女はこれでもかなりの重要人物の一人なのだ。寝ているはずなのに、部屋から消えると周りがうるさそうだ、主にシスコン気味の弟君とかがな・・・・・・

彼は、どこからかミューギィと寸分たがわぬ人形を取り出した。どこから取り出したのか？気にするな

彼は人形とミューギィを入れ替えると、他の者が何時このミューギ

ィが人形と気づくのはいつになることやらと笑いながら思うが、彼はまた何か呟き、その場から消えた。

「これに長々とだまされるロウ達はバカね」

部屋に残ったのは、本人にそっくりな人形のみ・・

外伝その１（後書き）

ミューギィ救済これは予想外でしたか？

外伝2　これも一種の形（前書き）

とっても短いです

外伝2　これも一種の形

「さて、暇つぶしにログ領域に来たが……何もなくて、つまらん」

「「じゃあ来るな（ないでください）！！」

ああ、この前愉快な旅の仲間が一名増えました。いや～なんかこの子・・・凄く弄りやすい！
最近ジル君いなくなったから暇で暇で・・・ん？向こうになんか小さい人影が・・・なんか面白そうな予感がする。ならばやることは一つしかないでしょ！

「おっ！なんか面白そうなもの発見～」

「ちょ！待ちなさい！ユウト」

「待ってくださいよ～勇人さん、ナルカナさん」

ハハハ・・・・誰にも私は止められんわ！

キングクリムゾン！

目の前には赤い髪の少女・・・いや、まさかこんな所で会うとは・・・どうしよう
お持ち帰りするか？

「なんか危ないこと考えてない？ユウト？」

ナルカナは心が読めるのか！

「いや、この子からナルカナと同じ力が少なからず感じられてな・・・おそらくこの子はナルカナの力の一部・・・おそらく”器”だろう」

「えっ！この子が私の一部？」

「え！気づかなかったの？自分の一部なのに？」

「まさか人の形してるとは思わなかったし・・・」

「あの・・・さっきからお二人は何を話してるんですか？」

「ん？禁則事項だよ？」

「なんで最後が疑問形なんですか」

「まあ、それは置いといてこの子どうする？」

「そりゃ放っておくわけにもいかないけど」

「あの？勇人さん」

「ん？どうしたミューギィ」

「勇人さんが引き取ってはどうでしょうか？」

「ん？引き取るね？」

この子引き取るのは別に文句ないけど・・・この子を引き取ると原作以前の問題が出てくるからな・・・ナルカナの救済やジルオルを初めとする、その他の原作キャラの前世との繋がりや若干の強化、ミューギィの救済とかで既にイレギュラーだけど、ナルカナは望が違うルートに入れば・・・問題はあるが・・・無視できるレベルだし、ミューギィについては原作では確か語られていなかったはずだから問題ないけど・・・この子は原作の中心にいるキャラ・・・つまり原作が跡形もなく崩壊する可能性がある・・・・それでも・・・・

「よしここはミューギィの提案に乗ってこの子を引き取ることにしよう」

「そうね、それがいいと思うわ」

「はい私もそれでいいと思います」

「じゃ、帰りますか」

「「ええ（はい）」」

外伝2　これも一種の形（後書き）

この展開はどうでしたか？ああ、原作が・・・

原作との違い（前書き）

原作との違いをまとめてみた

原作との違い

主な点

ナルカナが出雲におらずユウトと行動を共にする

ナルカナの救済は終了済み

沙月が旅団の存在を知らない。つまりミニオンのことも知らない（神剣については勇人達から聞いている）

沙月が旅団とのつながりがないので剣の世界でのタリア&ソルが来ない

ミューギィは救済は終了済み

ジルオル検索はする必要性ないが原作のため一応ルプトナを創り検索へ

その後本人達が存在を忘れていた。（戦争終了後ぐらいから）

沙月、ナルカナ、ミューギィの名前が　（ナルカナ）⇒　雨宮　凪（な）
紗（ぎさ）へ

侑（ゆ）へ　（ミューギィ）⇒雨宮　美（み）

月へ　（斑鳩　沙月）⇒雨宮　沙

沙月が望に好意を抱いていない、勇人に弄られる少し可哀そうな子を見る目で見ている（笑）

希美が望ｌｏｖｅではない。あえて言うならｌｏｖｅ寄りのｌｉｋｅぐらい。

ナーヤが望ｌｏｖｅではなくｌｉｋｅ（勇人とナルカナもｌｉｋｅ）

その他の点

ミューギィと沙月が若干、勇人とナルカナに依存気味

家族構成　父親：勇人
母親：凪紗
長女：美侑
次女：沙月　となっています

ルプトナは構成的には次女位だが世界放浪中なので家族構成に入っていない　あえて言うなら

義娘：ルプトナ⇒雨宮　瑠奈（るな）　て感じかな？

原作との違い（後書き）

改めて見ると・・・結構改変してるな

ようやく原作が始まるＺＥ☆

なお、沙月、ミューギィは勇人に好意を抱いています（家族的な）

沙月の報告書（前書き）

原作の前置き

沙月の報告書

おはよう？こんにちは？それとも、こんばんわ？
まずは、最初に自己紹介から、私の名前は雨宮　沙月
ここ物部学園において生徒会長兼公安委員会会長をやらせていただいております。
へ？公安委員会て何か？まあ、風紀委員みたいなものかな？
その話は置いといて

ここは物部学園まあ、いたって普通の学校です。そう普通のはずなんです
何故か人外（私含む？）が４人もいたり、実は前世が神様とか頭が危ない子が何人かいたりとそんじょそこらの学校では、決してありえないことを地でいっている学校です

さてまずは、私の状況からですね。私が生徒会長と公安（略）をしているのは、他の多数の生徒に推薦されたからです。まあ、当たり前ですけど。なんでも理由はあふれ出るカリスマだそうです。
絶対に原因は家のお父さんですね。家の大黒柱の雨宮　勇人さんはブッチャケかなりの娯楽主義者です。つまり、おもしろそうだからやってみよう。みたいなノリで会社作ったり娘に覚えたらどうなるのかな？と帝王学を身につけさしたりと。まあ、ハッチャケています。そして今はこの学園で教師やってます。いや、あのときは本当に思考が停止しましたよ。ええ、だって朝礼でいきなり新しい教師とか紹介されて来るんです。娘に少しぐらい報告してもいいと思います。周りの生徒もフリーズしてました。それはそうです少し前に急激に成長した一大企業の会長がイキナリ教師として紹介されましたから。勇気を出した生徒の質問には『権力とは使うためにある！』とか駄目な大人発言連発でした。そして今日も私は新たに増えた書

類に挑みます！

そうそう、今更ながらに思ったのですがなぜ、家のお父さんはあんなにもお金に好かれるのでしょうか？道端で拾った宝くじが一等とか、ふざけるな！と言いたいです。お母さんもお金以前に幸運が高すぎだと思います。何でしょうかね？あの人たちのために日々頭と胃を悩ませる。姉さんと私の苦労を利子つけて返却して欲しい気分です

沙月の報告書（後書き）

キャラ崩れ？

始まりの一こま（前書き）

原作へgo？

始まりの一こま

最近いつも同じ夢を見る。夢の内容は決まって同じ。光の中へ消えていく、大切だった
黒髪の少女と銀髪の青年の夢。

（そうだ……もう俺は・・・・・・大切なものを・・・・・・手放すわけにはいかないんだ・・・）

（絶対俺は・・・■■■■と■■■を離しちゃいけないんだ）

「はぅあっつ！？」

悲鳴が聞こえるそれは彼の焦りをつのらせるものだった。
頬に当たる柔らかい感触とほのかに甘い香り。その温もりを放すまいと彼は抱きしめた

「ちょっと、望ちゃん、そこはっ・・・」

（・・・・・・んっ？）

ようやく彼も違和感を覚えた。それと同時に記憶から少女と青年が消えていく・・・それでもなお逃がすまいと手を伸ばす。それと同時に感じる柔らかい感触

（微妙に触り心地の良い……むにゅ？）

それと同時に意識は瞬時に覚醒し、自分の手元を見ると・・・

もみもみ。

テヘ☆

はは、俺オワタ＼（＾ｏ＾）／

それと同時に自分の前面にとてつもない威圧感（オーラ）を感じ・・・

・恐る恐る見ると・・・

顔は笑っているのに目が笑っていない幼馴染の姿

「ねえ、望ちゃん・・・」

「はい！！」

「いくら私でもね、許容範囲てものがあるんだよ・・・」

ヤバイ！とにかくヤバイ！！咄嗟にで信助を探すが・・・目をそらした・・・あの野郎・・・ん？なんか口パクで言ってるぞ・・・なになに『ガンバ！』・・・凄いイイ笑顔でサムズアップしやがって

「ねえ、聞いてるの・・・望ちゃん・・・」

「はい！一字一句漏らさずに聞いております。希美様！！」

「そう、じゃあ、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか？」

「まて、希美それだけは勘弁してくれ・・・」

だって怖いんだよマジで何故かあのモードに入ると手からビーム出たりするんだよ（オレ限定で）

「じゃあ、今回はＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩじゃなくてＯＨＡＮＡＳＨＩで済ましてあげる」

「それに何の違いが！て、ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

＝＝◆◆◆＝＝

「ヒソヒソ」「ヒソヒソ」「……ヒソ」

ああ、何かいろんなものを失った気がするな・・・主に尊厳とか、女子からの評価とか・・・

「……下種」「……女の敵」「……エロ魔人」

ぐッぐぅ！？　生徒その1、その2、その3！　今さっきからうるさい！

確かにもみもみしたけど……肉は意外にもそれなりにあったが、結局皮だけの方が大かっｔ

それと同時にまた、感じる威圧感

「それ、禁句だよ？」

「……はは、またか、ワロス」　　ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！

＝＝◆◆◆＝＝

「おーい、望ぅ。生きてるか？」

「・・・・・・少なくとも、見捨てた奴の言うことじゃないな・・・

」

「もしお前が俺の立場だったらどうした？」

「見捨てた」

「・・・即答かよ・・・」

「当たり前だろ」

「それはともかくとして、なんだ、まだ平気じゃねぇか」

「・・・・・・これが平気に見えるのか」

「自業自得だな、自業自得」

「ぐっ」

正論だから言い返せない・・・

「だいたいおまえは――――」

と、信助がさらに続けようとすると。

「はーい全員席につけ～」

担任の勇人先生が入ってきた。まあ、なんやかんや言ってこの人が一番のトラブルメーカかもしれないな・・・そもそも、ここにいる時点でナンセンスなのに

「じゃあ、出席とるぞ、１～３１番・・・よし全員いるな」

『ちょっと待て！それ出席とったて言わないだろ（でしょ）』

何故かクラス全員の声がハモる

「本音を言うと、ブッチャけめんどくさい」

『あんた！本当に教師か！』

「それはそうと、面白い情報をＧｅｔしてな、おい、望」

「ん？どうしたんですか？先生」

「おまえ、詳細は知らんがセクハラしたんだってな？」

「ブフォ！」

「な・・・何で先生が知ってるんですか・・・さっきのことなのに」

「お、面白半分でからかってみただけなんだが、まさか本当にやってたとは・・・望、女好きもいいがもう少し節操と言うものを持てよ」

「うがぁ～」

「そして、隣のクラスの暁絶との男色疑惑が・・・」

『な、なんだって～』

『やっぱり望君は絶君と・・・・・・』

「そんな訳あるか～」

「本人はそんなこと言ってるが実は・・・攻めより受けと断言していたり」

『お、お～』

『よっしゃ！これで決まりよ！』

「違うって言ってんだろが～」

――ガラッ。

「異議ありっ！」

突如として引き戸が開いたかと思うと、よく通る女の子の声が朗々と響きわたった。ギョッとしたクラスが目にしたのは――――走ってきたせいだろう――ふわっと広がった赤いロングストレートの髪が揺らめいた姿だった。

「ん？どうした、沙月？なんか用事か？」

「え～となんかここに来なきゃ！！て電波を感じて・・・て！なんでそこで悲しい顔するのよお父さん」

「いや、沙月が電波少女になっちゃったと・・・悲しみにくれ」

「それはいいとして、何の話をしてたの？」

「実は望が男色で攻めより受けと言う話をだな～」

「だから違～う」

「何言ってんのよ！」

「せ・・・先輩」

望が救世主を見るような眼で沙月を見るが・・・

「望君は受けも攻めも両方とも出来るわよ」

その希望もあえなく崩れ去った

「あんたも敵か～」

『受けも攻めもできるなら、絶×望と望×絶も両方イケるわね』

『やっぱ望って男色なのか・・・注意しよ』

「だから違うって言ってるだろが～あんたらいい加減人の話を聞け～」

そうした望の叫びはあえなく無視され

この日望の男色疑惑が広まった

そのほとぼりが冷めるまで絶やついでに信助との絡みの同人が学校中（無論女子限定）で発売され学園祭の予算になったのは言うまでもない

なお、この被害は望だけに留まらず当たり前だが絶まで被害を被りアッチ系の目線を受けるるだけに留まらず……穴を狙わ

れる日々を送るのは仕様である

始まりの一こま（後書き）

望ガンバ！応援してるよ（やったの俺だけど）ｗｗｗついでに絶サーセンｗｗｗ

始まりのカウント

「ひどい目に在った・・・あれ？なんか、いやな予感が・・・」

「望ちゃん、望ちゃんがいつも先生に弄られるのは全生徒公認だよ？」

「知りたくなかった事実」ｏｒｚ

――――ドォオオオオオオオオオオオオオン！

爆音にも似た響きと読も似、下から突き上げるような衝撃が襲いいかかった

「なんだ！」

「きゃぁああ！」

（地震か？）

「いったいなにが・・・・・・うぐっ」

突如として猛烈な頭痛が襲いかかってくる

（こんな時に限って頭痛かよ・・・ついてないな・・・いや、さっき、かき氷の早食いとかやったのがいけなかったのか？）

「望ちゃん？どうしたの望ちゃん！？」

「望！？おい、どうした！？」

声は希美のものと、階段を駆け下りてきた信助のものだった。
耳をそばだてれば、少し離れたところで、早苗が生徒たちに避難を呼び掛けている。

「あ、あれ！」

物部のパパラッチこと美里が叫びながら、校庭の一角を指した。
そこには、もともと校庭でトレーニングをしていた運動部の生徒たちがいた。
それだけならいいが、そこに、表情の見えない人形のような少女たちが取り囲むように近付いている。
しかも、どこからともなく剣や槍などの禍々しい武器を取り出し、

躊躇無く、構えていた。

「ちょ、ちょっと、なにするつもりよ！？」

「嘘だろ」

「これって、どこかのクラスの演出とかじゃないのかよ・・・・・・・」

誰かのつぶやきは全生徒一致の願いであった。
そうであってほしい。これが現実であって欲しくなどない。
だが、人形の如き少女たちは、校庭の一角に追いつめたおびえる生徒たちを・・・・・・。

「やめろぉおおおお」

頭痛に苦しみながらも望が叫んだ。
まさにその時、

「ち～とおいたが過ぎるな」

どこからともなく表れた自分たちもよく知る人物が武器をふり下ろす少女たちを、まとめて蹴り飛ばした。

「生意気に私の寝どこに来るんじゃない」

そしてもう一人の乱入者が腕の一振りでほとんどの敵を吹き飛ばした・・・校庭に小規模のクレーターが出来たのは余談だが・・・

「・・・・・なあ、希美、俺の目に狂いがなければあれは・・・」

「うん、間違いなく望ちゃんの思った通りだと思う」

「何であんたら、そいるんだ～」

望の叫びが響き渡った

始まりのカウント（後書き）

ようやくスタートできそうだ

望の覚醒（笑）（前書き）

今回は望覚醒？

望の覚醒（笑）

戦闘は終了し・・・

「なんで先生方はあそこにいたんですか？と言うか彼女たちは何者ですか？」

「なんでっていっても・・・な？」

「そうそう、気にしない気にしない」

『気にするわ～』

「細かいことは気にしない。それと、あいつらのことは良く分からん」

「そうそう、うるさくて寝るのに邪魔だっただけだしね」

「それはそうと、望」

「何ですか？」

「しゃがんだ方がいいぞ」

「へ？」

言葉通りしゃがんだ瞬間に頭のあった場所に剣線が煌めいた

「ッーーーーーーーー！！！！」

「チッ・・・失敗したか」

そこにいたのは自分たちもよく知る人物

「あかつ……き？」

「・・・・・」

銀髪をなびかせる黒衣の少年――――――絶は、腰の達に手を置きながら黙り込んだ

「なんで、お前が・・・」

「・・・答える意味はない」

そして再度煌めく剣線・・・今度こそ避けられない・・・そもそも人間に避けることのできるスピードじゃないそう、人間には避けることも、防ぐこともできない。そう、人間には

「目の前で殺人しないでくれる？」

「なっ！」

ありえない、と暁絶は思考する。こんな距離を一瞬で移動するなど、ありえない。

例え神剣の担い手だろうと不可能だ。

暁絶の知りえる知識の中にはその様な規格外など存在しない

「じゃ、俺トイレ行きたいから望、後頼んだ」

は？全員の心境が一つになった

「え、ちょ待っ」

望の運命は決まった。

この瞬間に覚醒しない限り（・・・・・・・・・・・・・・）世刻望は死ぬ

「こんなところで、死んでたまるか～」

その瞬間、何かが溢れだす。
左右に広げた両手に何かが握る手ごたえがあった。
体がまるで浮いているように軽くなる
体に西洋の鎧らしきものが装備される

「覚醒・・・したのか？」

「の・・・・・・のぞ、む？」

「望・・・ちゃん？」

「俺は死なない！こんなところで！死ぬわけにはいかないんだ！」

これが後にＢＬ剣士として、女性限定で名をはせることになる、双剣の望の誕生である

望の覚醒（笑）（後書き）

望うwww

《相克》の覚醒　物語の始まり

「やはり《浄戒》の傍に《相克》ありか」

「だから絶、何なんだよその《浄戒》と《相克》って」

「お前に知る必要はない」

先ほどと同じ剣閃一筋。希美たちにはもちろん望にすら、いつ抜刀し、いつ鞘に戻したのかもわからなかった。
見えたのは銀色の閃光が瞬いたことぐらい。
しかし、見えていないにも関わらず望の体は反射的に双剣を眼前でX字に重ね防御した。

「いって～」

防いだには防いだがあまりの衝撃で腕が痺れている

「やはり体は覚えていたか・・・いや、魂はと言うべきか」

「・・・・・・えっ」

戸惑いの声を上げたのは望だった

「どおいう事だよ、魂は覚えているって」

「答える義理はない」

「ひどいな・・・俺たち、友達だろ」

「だからこそ、お前は俺の手で殺す」

「待ってくれよ絶、俺を殺すって、そんな。絶っ！？」

「さよならだ、望」

絶の構えが変化する

「安心しろ。お前を殺したら・・・永峰も俺が殺してやろう。寂しくないぞ」

その言葉に望の中の何かが弾けた

「てめぇ、ふざけんな、ふざけんなよ！お前が死ねよ！」

その直後信じられない早さで双剣を振り抜く

「くっ！」

続けてもう一方の刃で斬りかかる

「なめるな！」

だが絶も、その攻撃をいなし反撃する

だが、望は止まらない。何度も何度も斬りかかるが、所詮は魂は覚えていても、付け焼刃の技術。
何年もひたすら剣を振ってきた絶には敵わない。
しかも、怒りで攻撃が直進的になってしまっているので、余計に絶へその攻撃は通らない

「ぐあっ・・・」

「望、悪いが、これでお別れだ」

「お前たちと過ごした日々・・・・・・短いが、掛け替えのない大切な時間だったよ」

絶の全身からとてつもなく冷たい気配が噴き出した

「すぐ楽にしてやる。それがせめてもの」

情けだ、と告げようとした。だが、それよりも早く、絶は強い悪寒

を覚え、全力をもって後退した。
その瞬間に今までいた位置に信じられない衝撃が襲いかかったのは、
まさにその瞬間だ。
もし０コンマ何秒遅れていれば間違いなく即死していた強烈な攻撃
だった

「……やはり《相克》か」

望と美里がほぼ同時に叫んだ

「希美！？」

「のぞみん！？」

望は自分の目を疑った絶に襲いかかったのは今さっきまで端で震え
ていた希美だったのだから。

「…せない」

希美がボソッと呟く

「絶対に……させないっ！！」

その叫びと主に強烈な閃光と鈍い振動が世界を埋め尽くした

「望ちゃんは、絶対に殺させない！」

そこに佇んでいたのは、黒を基準としたドレス。その手に在るのは、長槍の両刃に鎌の様な横刃が付いている黒い槍。それを目にした瞬間、望の体に強い悪寒が走った。
そう、まるで自分を殺したモノの様に（・・・・・・・・・・）

「そうか」

絶は苦笑しながら、太刀せ受け止めた槍を滑らせていく

「あっ！」

「ナナシ、引き上げだ」

絶は窓辺まで跳躍した

「Ｙｅｓ，マスター」

彼の頭上に、すぅ、と一体の小人が出現した

「ぜ、絶！そいつは」

「望この勝負預けるぞ、次に会う時が最期だ」

彼は、そう告げると小人と共に消えた

「待て！絶！絶！」

あわてて駆け寄ったがそれよりも早く絶の姿は完全に消えてしまった
そのコンマ数秒後、また、とてつもない地震が、再び学園を大きく
揺るがした……

《相克》の覚醒　物語の始まり（後書き）

ようやくスタート・・・長かった

異世界それは未知の響き

あの騒動から少したち現在は沙月の演説?も終了し物部学園異世界生活が始まった
その後話を整理すると

・ここは異世界である

・現在の防衛力（神剣使い）は6人である。その内3人は一人でも異常なまでの戦闘力がある・・・チート共め

・現在の物資（食料や水）は現地調達しないと3日ほどしか持たない

そのことを

「あ、俺達お前らに同行出来ないからね」

「てな訳でガンバりなさ～い」

「へ?いやいや、ついてきてくださいよ」

望が懇願するも

「というか、世刻と希美お前ら二人いれば過剰防衛だから大して問題はないだろ」

「言ってらっしゃ～い手ぶらだったら・・・殺す！」

なんかナルカナが危ない？望達が可笑しいぐらい首を縦に振ってるし

～～それから少し過ぎ～～

こりゃまた、でかいの狩ってきたな・・・というかコレ、まんまブルファンゴじゃね？

「じゃあ、休んでいていいよ」

『はい』なんか疲労困憊って感じだね・・・神剣持ってんならもうちょっと体力あるはずだけど

それから幾日が過ぎ今日状況が一変した

「なにこれ？」
「これはものべーの力で遠くの景色が見えるんですよ」
「ほう、それは便利だな。」
「そういえば、先生たちの神獣はなんなんですか？」
「ん、不死鳥（フェニックス）」
「私は・・ちょっと特殊なのよ」
「ん？どういうことですか？」
「そういえば、今まで何をなさっていたんですかお父さん」
「あ、そりゃ・・アレだよアレ・・・な、凪紗」
「そうそう、アレよアレ」
「様は、何にもしていなかったと」
「そうとも言う」
「働いてください！」
「それはともかくチャッチャと確認しようぜ」

俺もそう言いながら画面を覗き込んでみるとまるでテレビのようにはっきりと見える。

「ほう、予想以上に鮮明に映るな」

すると同じく一緒に覗き込んでいた世刻が一点を見つめながら言い出した

「何でしょうか・・・あれは？」

そう言われ、俺も注意して見ると煙が立ち上っているようだった。

「煙みたいだな」

「煙が上がっているところに視点を切り替えますね」

永峰が言うと画面が切り替わった。

「・・・・・・っ！」

ここにいるほとんどの人が息を飲んだ。

そこは俺が見た夢のような光景だった。

多くの人々がミニオンによって惨殺されている状態だった。

指揮する男によってミニオンが動き人々が殺されていく光景だった。

大人が立ち向かっても為す術もなく殺され、逃げ惑う人も後ろから斬り殺される。

夢で見た時よりも生々しく、そして酷かった。

望や希美が助けに行こうと言ったが、沙月や美侑は反対した。

今から行っても遅すぎるし、仮に間に合ったとしても今度はこっちまで狙われることになる。

俺たちだけならまだしも百人以上の一般生徒もいるのだ。

彼らが狙われる可能性もあるからだ。

不意に指揮していた男がこちらを見て、にやりと笑った。

「む！？い、いかん！あやつ、こちらの目に気が付いてるぞ」

世刻の神獣レーメが叫んだ。

皆が画面を見るとミニオンになにか言っているようだ。

二、三指揮されたらしくミニオンが一斉に動き出した。

「ち！こっちに来るつもりだろうな。よっしゃ、お前ら来なくてい

いからな。日ごろの鬱憤を八つ当たｒ・・・じゃなくて迎え撃つぞ！」
「待ちなさい勇人！私も行くわよ」
「じゃあ、お前ら防衛は任せた！」
「じゃあ～ね」
「「「はい！」」」
「は～ホントなんでこの人達について行っちゃったのかしら私」
３人はもうこれ以上突っ込んでも無駄と学習し元ロウエターナルの旗本はため息を漏らすのだった

異世界それは未知の響き（後書き）

そおいえば、近頃、沙月と美侑の存在を忘れていた・・・あれ？あ
となんか忘れているような

剣の世界（前書き）

無双編？というか、いつも無双だけどね

剣の世界

実際、来たミニオンの数は結構多かったが・・・

「ま、我慢するか」

「そうしましょ」

八つ当たりには遠く及ばないな・・・あと、せめて千人ぐらいいたらな・・・

「ねえ?望ちゃん・・本当にあの二人だけで良かったのかな?」

「いくら先生達が強いって言っても流石に二人じゃ」

「むっ?・・・待て!何か来る!?」

レーメがそう叫んだとき、敵の後方が崩れそこから金色の髪をし、漆黒の鎧を身に纏、大剣を持った少女が飛び出してきた。

「大丈夫ですか!?加勢します!我が名はカティマ、カティマ=ア

イギアス」

だれかは知らないけど彼女が加われば三人で負担も減るだろ・・・

「あ～大丈夫かしらあの子…」

「え？どうしてですか？先輩」

「ぶっちゃけ、あの二人からしてみれば邪魔なだけなのよ」

「はい、私も長らくあの二人の傍にいますが・・・あの程度じゃ逆に足引っ張ってますね」

『・・・・・』

その言葉に俺、希美、レーメは絶句した・・・どんだけ強いんだよ

「大丈夫ですか！？加勢します！我が名はカティマ、カティマ＝アイギアス」

なんだ急にこの子・・・ぶっちゃけ邪魔なんだけど・・・というか、この子の顔……どっかで見たような……気のせいか？

「ええい、めんどうな」

「まあまあ、彼女も悪気があったわけじゃないんだし（ボソッ」

「ハァァァァァ！」

大剣でミニオンを斬り裂いている彼女だが・・・やっぱりどっかで見たことある様な・・・

「ま、俺もやるか」

「私のことも忘れないでよね」

「とりあえず、鉄拳制裁？」

とりあえず、鬼械神（デウス・マキナ）の部位召喚で殴り飛ばしときゃいっかナルカナは・・・

「いけ～メテ・・・じゃなくて、ファイガ×４」

今絶って～メテオって言おうとしたな・・・周りの被害考えろよ

カティマはこのとき『わたしって来た意味あるんでしょうか？』と考えていた

「・・・これで終わったか・・もうちょっと粘ってほしかったな（ボソッ」

「ええ、そうみたいね」

「それから、カティマ？なんでこんな所に来たんだ？」

「それについては、天使様。力を貸して下さい」

カティマは片膝をつきながらそう言った。

「「「「「「はあ？」」」」」」

その瞬間、神剣使い全員が首を傾げた

剣の世界（後書き）

最近パソコンの調子が悪いから凄く書きずらい・・・

天使？いいえ神様です

どうやらカティマが言った天使というのは・・・『天空を裂きて現れしは、天よりの使い』・・・らしくそのような伝承があって俺たちを天使だと思ったらしい。

嘘くせ～というかカティマ？原作知識はもうほとんどメインのイベントぐらいしか覚えてないからな…たしかこの子メインキャラだった様な気がする。ま、いっか

その後、カティマの計らいで彼女の村に行くことになった。安全になったということと一緒に生徒に伝えると何人かの生徒まで行きたいと言い出した。

とりあえず、村に行きたい生徒を連れて行くことにした。とはいえ、学園に残る生徒もいるので希美が学園にくっついている本体のものべーから一部の魂（ウィル）を切り離し、小さくしてつれていくこととなった。

「前々から思ったんだが、ものべー（次元クジラ）・・・便利すぎるだろ・・・」

「そうね。確かに便利よね移動は自分たちでした方が早いけど」

「私は眠っていて良く知らないんですが、エターナルでは、『最後の聖母』御用達でそうです」

俺は呆れながら、そう呟いた。

一緒に行きたがった生徒も連れてカティマは村に行くことになった。説明するために、カティマは先に村に向かっている。村に着くと俺たちの姿を確認するやいなや、家に入ったかと思えば一斉に武器を持って村人が俺たちの周りを囲んだ。
「おいおい、いきなり物騒じゃないか」

望や沙月たちも神剣を構えると村人たちは一歩後退りながらも、さらに警戒を強めた。
「俺たちはカティマに言われて来たんだ」
世刻がそう言うと村人たちが顔を見合わせてところどころから「カティマ様が・・・」というような声が聞こえた。
「皆さん、大丈夫ですか！？」
そのとき、村人たちの奥からカティマの声が聞こえた。
「皆さん、この人達は敵ではありません。だから武器をおろして下さい」
「カティマ様が仰られていた人達はこちらの方々ですか。もしやダラバの手の者かと思いましたので・・・お客人方、失礼しました」
「失礼しました。皆さん、場所を変えましょう」

「「どういうことか説明してもらえるかしら（ないか）？」」
一つの家に入ると俺とナルカナがカティマに質問した。
どうやらこの国はアイギアといい、王族が国を仕切っていたがダラバとか言う奴（画面で見た男らしい）がクーデターを起こし、それが成功したらしい。・・・しかし唯一の神剣士であるカティマが頭とし王国軍が抵抗していて、行動しているとのこと。
しかしダラバは鉾（ミニオン）を使用しており、それに対して対抗できるのが神剣士だけなのだが、現状ではカティマしかいないそうだ。

そこで神剣士である俺たちに、協力を頼みたいそうだ。
ぶっちゃけ言えばこの世界のプロテクトぐらいすぐに破壊できるんだがダラバも神剣士でり、ミニオンも使えることから俺たちだけしか戦えないこともあり、なんか可愛そうなんで手伝うことにした・・・ナルカナもなんでかこの子気に入ったし・・・後でなんで気に入ったのか聞いたら『覚えてないの？呆れた・・・』と言われ、彼女が『アルニーネ』の転生体らしい・・・そこでようやくあの顔と剣を思いだした。

協力する代わりにカティマについてきた兵士たちに生徒の安全を守ってもらうことにした。・・・めんどいしね
「もちろんです。あなた達にとって大切な仲間であるのですから」
とカティマも快く申し出を受けてくれた。カティマの側近である、クロムウェイにも了承してもらえた。

先ずはアズライールを奪還することを目標にそこまでの道のりにある二つの街ーラダとシーズーの街ーをどちらを通っていくかを決めることになった。
「アズライールに到達するには二つの道があり、それぞれラダとシーズーの街があります。どちらの街にも鉾と兵士が配備されております」
クロムウェイが斥候からの報告をし、ラダには兵士がシーズーには鉾が多く配置されているそうだ。
ラダに二人を、シーズーには三人で行くことになった。それで誰がどっちに行くかを話しあうはずだったのだが俺かナルカナが影分身使えば終わるんじゃね？と言うことで影分身，ｓに行かせることにした。望達は呆れていた・・・なぜに？

「戦争するのに天使様はずいぶん呑気ですね・・・」

「相手にならん」

「「同じく」」

「それと、天使様はやめてくれ」

「では、雨宮殿と」

「それだと、3人と被るから勇人さんでいいよ」

「では、勇人殿と呼ばせていただきます」

「もういいや」

その後、ナルカナは凪紗様、ミューギィは美侑殿、それ以外は名前で呼ばれるようになった。
だが、なんでナルカナだけ様付け？

それは置いといてエターナル相手に唯のミニオンが敵うわけないじゃん。

その後3分とかからず両方の町の制圧は終わった・・・早すぎね？

神剣士（望、希美、カティマ）は呆れていた・・・沙月は、なにかもう諦めたような顔をしていた
ナルカナとミューギィはやっぱりみたいな顔をしていた

天使？いいえ神様です（後書き）

影分身チート

無力の懺悔（前書き）

今回はアズライールの回なのでシリアスでシリアス成分が多いです

無力の懺悔

残る拠点はアズラなんちゃらとか言う街だけだ。
ぶっちゃけやりすぎた感があるんだよね（苦笑）

「勇人殿のおかげでとてつもない速さでラダとシーズーが制圧（解放）できました。なんとお礼を申し上げてよいやら」

「気にしなくていいよ。それと、疲れたから寝るわ」

「はい、では後ほど」

…

……

……

「では、時間が惜しいみなさんただちにアズライールへと向かいましょう」

「勇人さんはどうするんですか？」

「勇人殿はおそらくあの自らの分身を生み出す力を使い消耗しているはずです」

（いや、ただ本当に眠いだけです）

「なので今回は私たちで向かいましょう」

よってアズライールへ向かうメンバーは　望、希美、沙月、カティマとなった

「凪紗様と美侑殿は鉾の襲撃に備えて学園と村を守るらしいので今回は参加できません。なので今回は神剣士は私たちだけです」

（本当はただのサボリです。ミューギィもだいぶ毒されてるな…）

望Ｓｉｄｅ　久しぶりに使ったな…

俺達の前にアズライールの町が現れる。

街に着く直前、警備していたミニオンと戦闘になった。
とはいえミニオンといえども少数では相手にもならなかった。
早々に戦闘が終わり、アズライールに入るとそこは既に戦争の跡のような光景が広がっていた。
いやこれはもう戦争なんかじゃない。これはもう虐殺だ。抵抗できない者を殺すという行為だった。
そこに生きるモノは無く、そこに在るのは、切り裂かれ、押しつぶされ、ナカミをばら撒き、乱雑に放置されたナニカ。
　そこに在るのは、“かつて人であったもの”のみ
遺体のほぼ全ては眼を覆いたくなる様な状態で。俺は、込み上げて来る吐き気を堪えるので精一杯になっていた。

「ひどい・・・」
先輩がそう呟いただけだが気持ちは皆一緒だったろう。人の焼ける匂いは今まで嗅いだことのない気持ち悪さだった。。
　そう、俺の目の前に在るのは、老若男女問わず……正に老人も赤子も、町人も兵士にも関わらず皆殺しにされた、“かつて町であったもの”だった。
街の広場に着いたとき近くで物が動く音がした。全員でそちらを見ると一人の男がかろうじて歩いていた。男は力尽きたのか、倒れてしまった。
カティマが倒れる男性をに駆け寄り、俺たちが後に続いた。
俺たちが駆け寄ったときには男はもう死んでいた。
カティマは己の無力さを呪うかのように、叫び後悔の念が聴いているだけで伝わってくる。カティマは気力が尽きたのかその場に倒れてしまった。

そしてこの日、俺・・・いや、俺たちは自分の無力さを実感し『もっと強くなりたい』と心の底から願った

無力の懺悔（後書き）

感想待ってます。

神を呼ぶ者（前書き）

更新遅れてすいません。

神を呼ぶ者

俺たが目を覚ましたら、カティマから王の生き残りであること、王位継承には証が必要であることを教えられた。（その他も）それ以前に俺が寝ているうちになんかあったらしい
俺に関しては王の生き残りであることに対して予想していたから驚かなかったが、望達は驚いていた。いくら神剣士でもたかが少女に側近がいたり作戦会議に出れるわけがないだろ。第一名前で気づけよ。アホなのか？

ギロッ―――（女性陣）

いや、少し忘れていただけかもしれないな・・・話を進める。

「で、その証とやらは何そうだ・・・処に、手に入れるにはどうするんだ？」
「それが・・・」
どうやら、継承に必要であることしか教えてもらってないようだ。
だめじゃん！

～～時は過ぎ～～

とりあえず、なんか全員が生徒会室に集まってるので行くことにした
「寝過ごした・・・どうした？」
生徒会室に行くと沙月、望、希美が大慌てしていた。

「カティマさんが・・・カティマさんがいなくなったんです！」
「はぁ！」
話を聞くとどうやらカティマは証を探しに次の町であるアズラーセに向かったのこと。
「一人で行くとは馬鹿かあいつは・・・」
俺は呆れ果てた。・・・いつの間にかいる二人も呆れている

「ねえ、あの子本当にアイツの転生体？確かに昔から先走るところはあったけどここまで無謀じゃないわよ」
「本当、おかげで私の安らかな安眠が～！」
いや、君はほぼ永眠状態だっただろうが
「早くカティマを追いかけましょう！」
「ダメよ、ここから先は敵の領地なのよ？一般生徒たちを危険に晒すわけにはいかないわ」
沙月が渋るが・・・
「俺が行ってくる」
『えっ！』
「なに、そんなに驚くことか？」

ナル「だって、あのユウトが真面目になるなんて」

ミュ「本当にあのかったるい魔人の勇人さんが・・・・エターナルの集団でも来るのかな？」

望「勇人先生が真面目に仕事？・・・・マジで？」

希美「うそっ」

沙「ありえないわ」

俺の扱いひどくね！

「いや、学園にミニオンが来たときに暴れ足りないから」

『ああっ』

なに納得って顔してんの！

『行くのはいいけど街破壊しないでね（よ）』

「善処する」

『おい』

…カティマside　in…

私が継承の証を探しに出たせいで街が危機にさらされている。

街に大量の鉾（ミニオン）が迫っているのだ。

ダラバの圧政を止めることの出来るのは正統な後継者である私だけ・・

しかし、そのために証を探すことを理由にこの街を見捨てていいのでしょうか？

・・・答えは否！に決まっている

人を見捨てる者に王になる資格は無い！。

それだけでなくとも、私は見捨てることなどできはしない。

だから私は名乗り出る、もうあんな想いをしないために、後悔しないために全力を尽くします。

「我が名はカティマ！カティマ＝アイギアス！！」

たとえこの身が朽ち果てようとも街の人を守って見せる！

私は名乗りながら鉾を止めるべく、北門に向かう。

街の人が逃げる時間をかせぐために、仲間が追いかけてきて、保護してくれるまでの時間のために。

私は鉾に斬りかかった。

所詮は鉾、カティマの相手ではない。だがしかし、多数に襲われては対処が追いつかない。

徐々に傷が増えてくる。襲いかかってきた一人を鉾を切り捨てた瞬間に、私は忘れない光景を見た。

「ズドドドドドドドオオオオオオォォンッッッッッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

まるで大爆発が巻き起こった様な衝撃が周りを駆け巡る。
その瞬間とてつもない質量をもつ鋼の鎧を纏った機械仕掛けの神が降臨した。
何故それを私が神と認識することができたのかは良くわからない。
だが、確かに私はこれを見たことがある。いつの日か遠い昔に・・・
これは・・・あの方の

「よお、大丈夫か？」

そう、いつもこんな軽くて、そして強くて、強くて、私が憧れた。
古き神。
そして力に溺れずに正しく行使する。まるで、私の理想そのものだった。
必死に背中を追い求めた。でも、目指したのはとても遠くて遠くて。
何度も諦めそうになった。
でもそんなん時でも優しく慰めてくれたあの人、気が付いたら目であの人を追っていて、でも、あの人には共に歩むことを誓った人がいて（間違ってはいない）私に入り込む場所なんて無かった。
それでも・・・・私は・・・

神を呼ぶ者（後書き）

なんか、今回は結構筆が進みました。

救世主と言うより破壊神（前書き）

久しぶりの更新

救世主と言うより破壊神

カティマＳｉｄｅ

「大丈夫か？カティマ」

「あ、はい。大丈夫です」

『たく、何故小娘を助けるためだけに我が出なければならんのだ』

「そう目くじら立てるなって。ほら、久しぶりに使ってみたかったし」

『はぁ～もうよい。汝に常識が通用せんことはもう十分に承知しとるよ』

「とりあえずいくぞ！」

『応！』

あの声はいったい・・・

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

いや～久しぶりに鬼械神(デウス・マキナ)使うな
長いこと使ってなかったから、埃かぶってるんじゃないかと心配した（かぶるわけないんだが）
ちなみに使ってるのは、永劫(アイオーン)。ん？何故かって？・・・気分だ

「アル俺はもう眠いからさっさと殲滅するぞ」

『は～もうよい』

「来い！クトゥグア！」

『いきなりか！』

「フングルイ　ムグルウナフ　クトゥグア　フォマルハウト
ンガア・グア　ナフルタグン　イア　クトゥグア！」

『ちょっと待たんか！』

「だが断る」

召喚されたクトゥグアの炎は確かにミニオン全てを焼き払った。だが、同時にアズラサーセの街の3分の1を消滅させた・・・

後からカティマたちにどえらい怒られた

カティ　「あの地区の避難が完了していたからよかったものを一歩

間違えればさらなる大惨事を招いていたんですよ！」

望　「少しは自重してください」

沙　「だから、街は破壊するなって言ったのに」

ミュ　「あの、出鱈目な破壊力はなんですか！」

希　「それにしても凄かったねアレ」

いや、あれでも最低オブ最低レベルのパワーなんだよね。
長いこと俺の神気を浴びつづけた結果、本来よりも更にチート化したんだよね。
（全魔導書の武装が）
しかも、俺の直筆だから、滅茶苦茶相性良くて最大パワーじゃ普通に世界焼き払ったからな。
あの時はビビった

「すいません」

「ま、私はこうなること最初からわかってたけどね」

『なら止めてくださいよ！』

「いやよ、めんどくさいもの」

『はぁ～』

この時全員の心境にこの人たちって本当に常識が通用しないなと思った。

救世主と言うより破壊神（後書き）

クトゥグアが更にチート化。だが進化したトラペゾヘドロンはもっとチート

首都突入

Ｓｉｄｅ　沙月

グルン・ドレアス城砦都市、元アイギア王国の首都にして、現グルン＝ドラスの首都。
そこを目指すからには道中には大量のミニオンが配置されているはずです。
最初の拠点であるラハーシアに向かっている最中にも多数のミニオンに遭遇しました。（無意味だったけど）少し休息をとっているとそこに斥候に出ていた兵が伝令を報告しに来ました。
その内容は次の目的地であるレジアシスの街からミニオンの増援が現れたということでした。
その報告を聞いたカティマは自分が突破口を開くと言って、突撃して行き、凪紗さんもそれに続いて嬉々として突っ込んでいきました。
・・・頼むから被害を大きくしないでくださいね・・・へ？無理に決まってる？・・・ですよね・・・ああ、胃が痛いです。
とりあえず二人を追いかけることにしました。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

二人に追いついた時には、呆然とするカティマと一部焦土と化した台地が広がっていた・・・予想してたけど、やっぱりこうなるのね。

そんでもって首都に到着。首都だけあって其れなりに精強なミニオンが配備されていた。
街中のミニオンはあらかた殲滅出来たようで俺達は城門前まで着ていた。
「あとはダラバを倒すだけですね」
「そうね、しかしあっけなさすぎる。罠かも」
確かにここまで来るのに順調すぎる。ミニオンの数もあまり多くはなかった。
「罠だったとしても、罠ごとぶっ壊せばよくね？」

「それができるのは・・・あれ？結構いる？」

「そうね、勇人殿に、凪紗様、それと美侑殿ですね」

「3人もいるよ・・・」

カティマが城門を開けると、背後に数十ものミニオンがいきなり現れた。
「やっぱり罠だったか・・・」
「わかってたんなら警告ぐらいしてくださいよ！」

「カティマ！ダラバと決着をつけてこい！」
「はい！」
俺がカティマにそう言うとカティマは城の中に駆けて行った。

「カティマさん一人では危なくないですか？」
希美が当然の疑問を聞いてきた。
「前に言っただろう。ダラバはカティマと戦いたいのだと」
そう、王家とかそんなのは関係なく、運命で定められた戦い・・・
前世のやり直し
「それに一騎打ちだろう。なら、一人で行かせても問題ない」
「勝てるかしらあの子」
「さあな、まあ、勝てるように祈ろうぜ」
「そうね、これはあの子の問題だから」
さあ、今回はどうなるかな？・・・また相討ちか・・・それとも

異国の少女（前書き）

エヴァリオ登場！・・・だけど

異国の少女

謁見の間に入ると聞こえてくるのは剣戟。
ここに来るまでに結構な時間がかかったにもかかわらず、未だに勝負をしている二人。のろのろと来たから小一時間は闘ってるな。
とりあえず、シリアスな空気を読んでおくか
「互いに疲労している。決まるのは・・・一瞬だな」
「ええ」
俺の言葉にナルカナが空気を読んだ発言、結構レアじゃね？

「なにか失礼なこと考えてない？」
こうして会話している間も剣を交えている二人。
しかし、お互いにかすり傷程度しか与えられない。
そして一際激しい攻防の後、カティマが弾き飛ばされ、壁に激突する。
『カティマ（さん）！』

望たちがカティマを助けに駆け出そうとした所で道をふさぐ。
「待て、心配するな、見てみろ」
その言葉どおり、見ればカティマは剣を支えに立ち上がり、ダラバに向かって構えている。
そして、お互いに気を高め、剣を構える。
「これで・・・終わりです！」
カティマが床を蹴りダラバに突っ込む。
［ザシュッ！！］
カティマの剣がダラバの身体を貫いた。
「ふ・・・ふふふ・・・やはり・・・定められた運命からは逃れられなかったか」
その身を剣に貫かれながら、笑うダラバ。

「私の苦しみはここで終わるが・・・私が背負った苦しみは、貴殿に受け継がれる。
これから先・・・永遠に、自らの血に宿った呪いに・・・苦しめられるがいい・・・」
そう言いながら、自ら神剣を引き抜くと、
「さらばだ・・・」
ダラバは、その場に静かに崩れ落ちた。
それと同時にカティマも同じく崩れ落ちた
『カティマ（さん）』
「心配するな、気を失っただけだ。それよりも」
「こいつをどうするのかって事ね」
「ああ、まだ生きてるしとどめを刺すべきなんだろうが・・・」

「「それだと、面白くないんだよな（のよね）」」

『ハハハ・・・』

なんだ、その乾いた笑いは

「そうはいかないわ。その体は今から私が使うんだから」
聞き慣れない声が響く。
次いで突如俺達の前に現れたのは、異国風の衣服を纏った少女。
ん？あいつは・・・

「エヴァっち」

「エヴァっち言うな！・・・て、この名前で呼ぶのはもしかして・・・」

「よっ！」

「ゲッ、悪魔（メフェスト）」

「ゲッ、とは失礼だなエヴァっち」

「なに？ユウト知り合い？」

「ああ、散歩のついでに立ち寄った世界で会った」

「散歩で世界を歩くのはあんたぐらいね」

「それで？」

「色々あってあの子の妹が灰色に染まった」

「その過程にいったい何があったのよ・・・」

「そうよ！こいつのお陰で私の妹が特殊な趣味に目覚めちゃったのよ！」

「反省もしていないし後悔もしていない」

「何やったのよ」

「冗談でＢＬ渡したらハマった」

「その後、あの子は隙あらばカップリングの話をするのよ」

『ハハハハ・・・』

なんだよ、今まで空気，ｓ

「それよりも、その体を使うってどういうことだ？・・・まさか、お前オッサンが趣味か」

「んなわけあるか！！」

「じゃあ・・・」

「少なくともマトモなこと考えてないのはわかるわ」

「それはともかく・・・わたしは秘密結社、光をもたらす者としてそのタラバの体が欲しいのよ」

「ぷっ・・・秘密結社とかガキかよ・・・ぷっ」

「ユウト・・・ぷっ・・くっくっ・・笑っちゃ・・ぷっ、だめよ」

「そこの二人うるさい！」

「それはともかく、なんで、タラバがミニオンを持っていたと思う？」

「今までの流れ的にお前が渡したんだな」

「そこ！私が言う前にネタバレすんな」

どうも、しまらないエヴァっちでした・・・剣の世界編・・終了

「勝手に終わらせるな！あと、エヴァっちて言うのやめろ！」

異国の少女（後書き）

いつもより、早めに方針できた。中途半端ですけど、いったん切ります

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8682q/

聖なるかな…終わりの剣

2011年11月8日00時59分発行